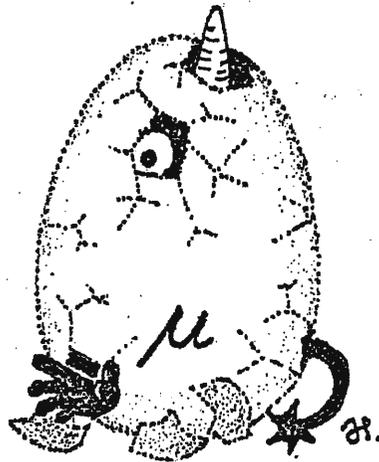


日本生物学会誌

第 33 号



日本生物学会

1993年 7月31日

第 33 号
も く

| | |
|--|------|
| 奥野良之助：『自由の森学園』見学記 | 1269 |
| 盛口 満：飯能博物誌モドキ | 1279 |
| 栗間 修平：小人閑居して | 1283 |
| 奥野良之助：大学における学生の地位――新進気鋭の 大学教官は、今、何を考えているか | 1298 |
| の ら：いっせい草抜きボランティア――理学部 の人は勤労奉仕がお好き | 1310 |
| 編集局だより | 1313 |

『自由の森学園』見学記

奥野良之助

話は、今年の1月にさかのぼる。

まったく知らない女性の名前で、一通の手紙を受け取った。読んでみると、数年前に書いた『魚陸に上る』を読んでとってもおもしろかった、という、高校生の手紙であった。

話は、さらにさかのぼって、40数年前、私の高校生のころのことになる。

私が旧制中学4年生のとき、教育制度が変わり、新制高校2年に編入された。全国に新制大学ができた時である。そして、それまで男子は中学校、女子は女学校と、男女別学であったのが、この時から共学となった。ところが、どういうわけかその共学は、新制高校1年生のみについて実施され、高2、高3は別学のまま据え置かれたのである。私たち2年生は、女の子と仲良く手をつないで登校してくる1年生を横目で見ながら、野郎だけの学校生活をおくらざるをえないという、悲惨な状況に置かれたのだった。

その2、3年前には、日本が戦争に負け、先生の言うことが一夜にして逆転し、とんでもないショックを受けていたわれわれである。この追い討ちで、学校に対する不信は抜きがたいものとなった。すっかりひねくれてしまったわれわれを見て、教師は、ずっととだえていた修学旅行を復活するという妥協案を出した。どこへでも好きなところへつれて行ってやるから、どこへ行くか君たちで決めろという。アメリカ民主主義がはいってきたばかりの時である。私たちは、行き先を投票で決めることにした。

投票はきれいに二分した。一方は、アメリカ、スイス、オーストラリア etc、今ならともかく、満身に飯も食えない当時としては、まったくの夢物語である。もう一方は、校庭でキャンプファイアー、淀川散歩（私のいた高校は、淀川のほとりにあった）。

結果を聞いた教師は激怒した。「なんだ、これは。お前ら、なめとるんか！」「だって先生、どこでもつれて行ってやると言うたやないですか」

かくて修学旅行はおじゃんになった。一年下の下級生は来年、女の子と手をつないで修学旅行へ行ける。男だけで修学旅行など、馬鹿らしくて行けるものか、という私たちの気持が、この投票に現れたわけである。

そのとき以来、私の心の中には、女子高校生に対するあこがれがずっとひそんでいる。そのあこがれの女子高校生から、手紙をもらったのである。私は有頂天になった。そして、さっそく返事を出した。

彼女は、返事がくるとは思っていなかったらしい。びっくりして礼状がきた。そ

こでまた私は手紙を書いた。

もっとも、いくら私だって、その手紙の内容がつまらなければ返事など出さない。彼女の手紙は、生き生きしていて、自分というものはっきり持った、すばらしい手紙だったのである。先生のいうことを唯々諾々（いいたくたく）と聞き、これをやれ、ハイ、あれをやれ、ハイと、まるで死んだ魚のごとく生気のない最近の学生にうんざりしていた私は、現代の日本にもこんな若者がいたのかとほんとうにびっくりした。そして、ついにペンフレンドになってしまったというわけである。

2、3度手紙の交換をしたころ、また見ず知らずの人から手紙が来た。今度は男である。あまり期待せずに手紙を開いたら、なんと彼女の先生ではないか。どうやら彼女が、私とペンフレンドになったことを先生に言いつけたらしい。彼女の先生なら、粗略に扱うわけにはいかない。そこで丁重な返事を出したところ、今度は大きな封書が届いた。その中から出てきたものが、また大変なものだったのである。

『飯能博物誌』と題されたその印刷物は、B5版をそのまま製本したもので、自筆の絵と自筆の字で、化石・キノコ・植物からタヌキやイタチにいたるまで、自分が見たり調べたりしたことを、克明に記録したものである。その絵は詳細を極め、しかも味があって、たいていのことは出来るが、小学生以来図画だけは苦手であった私に、妬み心を起こさせるほどの見事なものである。文章もまた軽妙で、まあ、このほうは私も少しは自信があるから、やきもちも焼かなかったが。

さらに私をおどろかせたのは、その膨大な量である。私がもらったのは「第6集」だったが、1集に100報、つまりすでに600報が出ているのである。1年に100報、2週間に1報である。私も「金沢大学平和問題ネットワーク」の機関誌を週に1報出して、各学部の配布者のひんしゅくを買ったこともあるが、せいぜい2カ月くらいしか続かなかった。上には上があるものだとは私は心から尊敬してしまった。

自然界に存在するものを、何でも取り上げ、ことこまかに記載していく。それが、博物誌（ナチュラルヒストリー＝自然誌）の原義である。大学では早々になくなってしまった。そして、いまや算術が幅をきかし、つまらぬ統一理論にうつつを抜かしている。そんな時代に、こんな博物学者がまだ生き残っていたのかと、正直感激した。

もっとも、誤解のないように言うておくが、私にはこの真似はできない。我が学会の読者には言わずもがなのことだが、私は自然も生き物も好きではないし、そんな好奇心はもともとない。といって、統一理論はもっと嫌いである。では何が好きなのかと聞かれたら困る。統一理論をこわすのは結構好きだけど。

かくして、彼女の先生との手紙の交換まで始まってしまった。そして、二人の連名で、講演の依頼がきたのである。何でも、進路部というのがあって、そこで私に講演をしろという。

この話を、たまたまやってきた第6編集局長に相談した。彼は仰天していった。

「先生が、進路相談するんですか!？」そして、続けた。「生徒がかわいそうですよ」

その理由は、当学会員には説明しなくてもいいだろう。

もっとも、その先生の手紙には、うちの進路部講演会は、どの大学を選べばいいかというようなことではなくて、いわば人生の進路について考えるような話をしてもらっている、とあった。そして、この前に呼んだ人は、北海道二風谷のアイヌの方だとも書いてあった。6局長にそういうと、彼は、「先生が、人生の進路の相談に乗ったりしたら、一生うだつが上がらなくなりそうですね。まだ、大学選びの相談のほうがましとちやいますか」

それはともかく、このような生きのいい先生や生徒を育てているこの学校――それが『自由の森学園』である――を、私は一度自分の目で確かめてみたくなった。それで、6局長のいや味を無視して、この講演を引き受けることにした。それに、講演に行けば我がペンフレンドにも会えるではないか。

もっとも、そのことは、同時にためらうことでもあった。私はもうすぐ62歳になる、どうみてもしょぼくれた年寄りである。彼女は、今を盛りの、17歳の高校生。どう見ても私のほうが分が悪い。80歳の老ゲートルですら、17歳のマルガレーテに振られたではないか。文章を書くのは少々きたえてあるから、いくらでも若々しく書ける。だが、実際に出会えばその手はきかない。私は「人を外見で判断してはならない」と、手紙に書いて送った。もっとも、彼女のほうも、私に会うというので、そうとう緊張していたらしい。

さて、この話を、教養部の数学者、H先生にしたところ、ひどくうらやましがられた。彼は『自由の森学園』のことを知っていて、前から興味を持っていたそうである。「僕もいっしょに行きたい」と言い出した。

このH先生の「いっしょに行きたい」には、かつてひどい目にあったことがある。数年前、公害や環境破壊について、講演せよとある卒業生が言ってきた。この卒業生は在学中、私の指導学生をもって任じ、あらゆることを指導してくれたので、彼が「こうせよ」というと、「ハイ」というくせがついてしまった。だから、そんな話を高校生にしゃべるのはいやだったのだが、この時ついに「ハイ」と言ってしまったのである。「おい、いっしょに行かんか」とうっかり言ったのが運のつきであった。彼はついてくるというのである。行って何をするのかというと、私の話を生徒の間へはいつ聞いて聞いているという。こんな男に聞かれていたら、おちおちしゃべることもできない。

だいたい、教養部の先生は、このH先生に限らず、野次馬が多い。いつだったか、教養部で計画した連続講義の一人として、教養で講義したことがあったのだが、講義室へはいつてみると、いちばん前の席にH先生がニヤニヤ笑いながらすわっている。うしろの方には、政治学や法学など、我が学会員の教授、助教授が数人、うれしそうな顔を並べていた。私は、講義を始める前にクギを刺した。「ここには、授

業料を払わずに聞きに来ている人がいる。聞くのは勝手だが、そういう人の質問は禁止する」笑ったのは、金を払わず聞きにきた連中だけで、学生はポカンとして笑わなかった。

といっても、私がさそったのだから、いまさら断るわけにもいかない。それではついてこい、といって、まいてしまおうと相当強引に車を走らせた。彼はそれでも、ついてきたのである。まだ40歳くらいだから、やはり運転はうまく、まけなかった。なにしろ、徹夜で車を走らせて、金沢から九州の吉野ヶ里遺跡を見てきたという御仁である。埼玉県にある『自由の森学園』まで、500キロのみちのりくらい、彼にとっては朝飯前にちがいない。

これは困った。ゆっくりペンフレンドとデートもできない、と思っていたら、彼は手帳をとりだして予定表をたしかめ、「ああ、委員会がひっかかっている」と悲鳴を上げた。彼は最近、解体の危機に瀕している教養部の運命を決める「将来計画委員会」の委員になって、解体派の連中をかたっぱしから言い負かしているのである。この時ほどほっとしたことはなかった。

講演の予定は6月30日である。私は心も軽く、その前日の29日に、愛車ターセルを駆って出発した。北陸高速に乗って、アクセルを踏んだら、90キロまではよかったのだが、100キロ近くになると、ハンドルががたがたし始めた。メーターはすでに19万8千キロを指している。世界に誇るトヨタも、そうとうがたがきているらしい。果たして埼玉県まで持つんかいなと思いながら、はやる心を押さえて90キロで走ったが、なんとか480キロを走破して、目的地、埼玉県飯能(はんのう)市についた。

この日の夕食は、先生のほうとの会食の約束をしていた。ペンフレンドには、翌日の夕食を約束している。待つことしばらく、現れた先生は、私が思っていたより、ずっと若かった。年齢を聞くと、何と私の息子や娘より下であった。私は例によって飲まないが、彼はビールを一本飲み、話はずんだ。

信用してもらわなくてもよいが、私は人見知りで恥ずかしがりだから、初対面の人と話すのは苦手なのである。しかし、彼とは初対面のような気がせず、好きなことを言って意気統合してしまった。

『自由の森学園』は、この飯能市から山手のほうへ少しいった、自然の中にある。明るく、何もすることないから、早く学校へ行った。M先生がたむろしている理科室へ案内される。牛の頭骨やら、油の染み出たマグロの頭の骨やら、雑然とした汚い部屋で、その汚さは生物学会本部の比ではない。M先生は恐縮していたが、私はこんなところのほうに落ち着くのである。

ソファにすわって煙草をふかしていると、始業前の時間だから、あわただしく人が出入りする。なかなか男前の男子生徒がやってきて、不思議そうに私を見ているから、「まあすわれよ」といってすわらせて、話をした。

「大学へ行くの?」「大学へは別に行きたくないんですけど、僕、予備校にあこ

がれてましてね」「そりゃええな。大学をだしにして、予備校へ行けばいい」

あとで聞いた話だが、あまりにも自由なこの学校ですと、ときどき、予備校のような管理されたところにあこがれる生徒が出るらしい。

「僕、今、人力飛行機をつくってましてね」

なれてきたのか、彼は生き生きとしゃべり出した。

「全国大会へ出るんですよ」「全国大会って、あの琵琶湖でやるやつかい」「そうですね」「そりゃいいな。君が乗るの?」「年齢制限がありましてね。18歳以上にならないと乗れないんです。僕、まだ駄目なんです」「それじゃ、発射台の上で、飛行機おす役やね」「そうですね。何かおもしろいパフォーマンスやって、テレビに写ろうと思ってるんです」

非常に感じのいい若者だった。私は、生き生きしてれば、男子高校生だって好きなのである。

眼鏡をかけた、割に背の高い女子高校生がはいってきた。私のほうをげげんな顔をして見ている。(間違いない。わがペンフレンドだ) 私は直感して立ち上がった。彼女はおずおずと、「もしかして、奥野先生では・・・」「そうだよ」「ああ・・・私、〇〇です」私は手を伸ばして握手を求めた。彼女はがちがちになっているようだった。

私の講演は午後である。私は学校の中をあちこち歩き回った。想像以上に自由な雰囲気である。廊下にすわりこんでぼんやりしている女子生徒がいるかと思うと、体育館では太鼓を叩きながら踊っている男子生徒もいる。教室を掃除している子もいれば、机の上にすわってしゃべっている子もいる。ときどきチャイムがなるが、授業中なのか休み時間なのか、判然としない。

地学の先生の許可を得て、授業を見学した。地球の内部がどうなっているかという話だったが、条件をいろいろ示して生徒に問いかけ、ひとつひとつたしかめながら授業を進めていく。生徒に考えさせて理解させるというやり方で、話には聞いていたが、初めて見た。大学にはまったくない授業である。実は、私もちょっとやりかけてみたことはあるのだが、学生の無反応ぶりに嫌気がさして、早々に止めてしまったことがある。今は、学生が聞こうが聞かないが、おごそかに「真理」を講義するだけにしている。

わいわいがやがや、生徒は結構にぎやかだが、先生の問いかけにはちゃんと誰かが答えていて、連携プレーはなかなか見事だった。もっとも、私の隣の机にたむろしていた三人組の男子は、授業にまったく無関心で、ぼそぼそ何かしゃべりあっていた。「自由の森」にも「問題児」がいるんだなど、おかしかった。

でも、いちばん気に入ったのは、先生はもちろん、生徒もまた、不意の侵入者である私のことを、ぜんぜん気にかけなかったことである。管理社会では、見知らぬ人をすべて侵入者と見なし、排除しないまでも、うさんくさげな目でにらむ。最近着任した生物学科のある教授は、私を泥棒と間違えた。あれにはさすがにびっくり

した。だから、私は、気持ち良く授業を見物できた。もうちょっとで、先生の問いかけに、手を上げようとしたくらいである。からくも思い止まったが。

授業を見学したり、校内をあちこち見て歩いているうちに、午後の講演の内容を変えようと思い始めた。生徒たちは、よく言えばのびのびと、悪く言えば勝手気ままにふるまっている。こんなひどい(?)ところだとは思わなかったので、私だって少しは「教育的内容」を講演原稿に盛り込んでいた。講演原稿AからEまで、5回も書き直しているのである。しかし、こんな勝手気ままな連中に、教訓をあたえる必要はない。こっちも勝手気ままにしゃべってやる。

「私とM先生の二人だったらどうしよう」とおびえていたベンフレンドだったが、会場の音楽室には5、60人もの生徒がやってきた。先生らしいのも何人かきている。私は、さっきの授業を思い出しながら、がやがやされるのを覚悟してしゃべり始めた。

ところが、彼らは静かに聞いているのである。そして、勤どころでは必ずクスクス笑う。金沢の学生と、大違いである。彼らは、マンガの話をしなければ笑わず、落語の考え落ちみたいなことをいうと、せせせとノートに書いている。およそ2時間、気持ち良くしゃべることができた。

何を話したかという、私がこれまでの人生で、何を考え、何をやってきたかということである。私だって若いころからいろいろと理想を持ち、いろいろやろうとしてきたのである。しかし、それは、いずれも実現する前になにかじゃまがはいって、うまくいかず、思いもかけぬ方向へ流されていった。ただ、流されていったところで、また性懲りもなく、いろんなことをやってきたのが、取り柄と言えよう。そんな話をした。

本当は、この学園みたいに、自由が保障されているところで自由にしていたって、それは本当の自由ではない。自由のないところで自由を求めて戦う、あるいは、すきを見つけて小さな自由をつかまえていく、それこそが自由なのだ、ということが言いたかったのである。わかってくれたかどうか。

講演のあと、M先生が質問を求めた。一人の生徒が立ち上がって聞いた。

「先生は大学で何をしておられるんですか」

これには少々参ってしまった。

「そんな、答えにくい質問をするな」

みんな大笑いになって、質問も終わった。

理科室へもどり、わがベンフレンドが、まずいまずいインスタント・コーヒーをいれてくれた。まずかったけど、疲れていたし、いれてくれた人が人だったし、おいしかった。

彼女は、「お話を聞いて、気が楽になりました」と言った。進路についてあれこれ悩んでも始まらない、自分さえしっかりしていれば、どんなところへ行っても、なんとかなるさうだ、と思っただけだ。センスの本当にいい子である。

そこへ、彼女の友達が3人ばかり押しかけてきた。私の話が気に入ったらしい。M先生も含めて、わいわいがやがや、大議論になった。このところ、金沢大学では味わえない議論である。彼女らは思っていることを素直に聞いてくる。ここでも、私が金沢大学でいったい何をして暮らしているのかが問題になった。よほど不思議だったらしい。彼女らが持っていた大学、あるいは大学教官のイメージと、私がいまにもかけはなれていたからだろう。

スクールバスが出てしまい、ペンフレンドとその友達二人を、私が飯能駅まで送っていくことになった。そして、ついに、友達二人も夕食に招待することになってしまったのである。

彼女らはよく食べ、よくしゃべった。

「先生。あと何年で定年ですか」「あと3年半だよ」「それからなにするんですか」「そうやな。もう一度、大学受けなおして、学生になるかな」「あら、それならちょっと早目に退職して、私たちといっしょに受けませんか」「そうしたら、同級生になるわね」「でも、私、一級上になりたいな。おい、奥野、肩もめ、なんて言っちゃって」

こんな調子である。そして、ついに同窓会を結成することになった。

話はM先生のことになり、私だって、「平和問題ネットワーク」というのを、週刊で出したことがあるのだぞ、と威張ったら、「あら、先生、大学でそれやってるんだ」と、見抜かれてしまった。

わがペンフレンドはおとなしい性格のようで、あまりしゃべらなかつた。二人きりの会食を夢見ていた私としては、楽しかったけれど、少々残念でもあった。でも、また行けばいいのだから、まあいいか。たった500キロ飛ばしていけばいいだけである。もっとも、今のターセルでは少々心許ない。自動車屋のお兄ちゃんに言って、ちゃんと修繕させなくちゃ。(追記：七月の終りに、ついに新車に買い替えることにした。今度はコルサのセダンだぞ)

ところで、彼女らから聞いた話によると、この『自由の森学園』は、設立当時の借金が20億ほど残っていて、経営は苦しく、先生の給料も安いのだそうである。今の日本に減多にないすばらしい学校だから、なんとか生き延びてほしい。金沢大学ならいますぐ潰れてもどうということはない。私にはもう年金がついているからね。聞いてみると、「自由の森学園の教育を支える会」というのがあって、だれでも支援会員になれる。ささやかながら講演料をもらったので、私も会員になることにした。もっとも、見せてもらった「会則」をよく読まなかつたものだから、寄付金の5万円を見落として、年会費の1万円だけ払ってきた。踏み倒したわけではない。帰ってすぐ、詫言状といっしょに、ちゃんと送金した。

以下に、その会則をつけておく。日本生物学会の会員たるもの、心あれば維持会員になってください。心ない会員は、せめて金を払うことによって、形を整えてく

ださい。いずれにしても、なれということです。（追記：ところがせっかく送った5万円が、また送り返されてきた。5万円寄付してなる特別会員というのは、昔一時あっただけで、今はないのだそうです。だから、年たった1万円でもいい。「日本生物学会の名誉にかけで、支持会員を募集します。《「日本生物学会」の名誉って何ですか？ = 6局長。何か分かんけど、あるんや = 会長》

送り先

郵便振替 東京8-61873『自由の森学園を支える会』
氏名（フリガナ）・男女別・年齢・住所・電話・金額（1万円以上）を通信欄に記載しておくこと。

（生物学会本部に、専用の振替用紙があります）

「自由の森学園の教育を支える会」会則

（名称）

この会は「自由の森学園の教育を支える会」といい、事務局を自由の森学園事務局内におく。

（目的）

この会は、自由の森学園の建学の精神を教育の場でより正しく具現し、さらに発展させ広めていくために、会員相互の交流を深め力をあわせていくことを目的とする。

（活動）

この会は次のような活動をする。

1. 学園通信などの発行を通じて、学園および会員相互の交流を深め、教育に対する理解を深める。
2. 学園の教育の充実のために、学園に対する寄付等、可能な資金の援助を行なう。
3. 毎年秋に開かれる公開研究会やその他学園諸行事等への案内参加・授業見学、研究会等への案内・参加などを推進する。
4. 会員が教育に関する学習会、懇談会、講演会、同窓会など諸会合を開く場合には可能な限り援助する。

（会員）

この会の目的に賛同する方は、誰でも入会の手続きを経て会員になることができる。この会の会員を次のようにする。

1. 一般会員……自由の森学園在校生の父母、および卒業生の父母、一般市民の方、教職員、学園関係者、満25歳以上（自由の森学園評議員資格年齢）の自由の森学園卒業生

2. 卒業生会員……自由の森学園の卒業生で満25歳に達しない方は同窓会の会員となることで卒業生会員となる
3. 特別会員……学園に対して金5万円以上をご寄付頂いた方
(但し、一年間に限る。その後は年会費1万円を払い込むことで継続できる)

(入 会)

所定の申込書に氏名、住所など記入の上、会費を添えて郵便窓口よりの送金をもって入会手続きとする。

(会 計) この会の活動は会費をもって支弁する。

この会の会費は次のとおりとする。

1. 一般会員……年額1万円(以上)。ただし免税の対象とはならない。
2. 卒業生会員……同窓会の会費として年額2千円(雑誌代・通信費)

この会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。会計年度毎に会計報告を行なう。

(退 会)

会員が退会しようとする時は、退会届けを事務局宛に出す。

(役 員)

この会には次の役員をおく。

1. 会 長……1名 菅原文太
2. 副 会 長……3名 東野英心・松井幹夫・窪寺芳江
3. 会計監査……2名 本郷安子・上原国子

この会の役員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(総 会)

毎年一回学園の研究会、行事などの機会に総会を持つ。

(事務局)

所在地 「自由の森学園の教育を支える会」事務局

〒357 埼玉県飯能市小岩井613 自由の森学園事務局内

電話0429-72-3131

この『自由の森学園』というのは、点数や偏差値によって子供を序列化し、差別と選別を完成させていく今の競争的教育を否定するために、遠藤 豊なる人物が(どんな人かよく知らない)設立した学校らしい。だから、まったく点数をつけないのだそうです。その遠藤氏の「自由の森学園の教育精神」なる文章を、最後に引用しておきます。

自由の森学園の教育精神

ひとりひとりの子どもたちや若者たちが、まさに人間らしい人間として成長することを助ける教育、それが自由の森学園の教育である。《『側面からの援助』だ！》

人間の子が人間らしい人間として成長することを助ける教育、それは、はかり知れない精妙さと限りない可能性を潜ませた人間への畏敬を基調とする教育である。

若者たちひとりひとりのなかに、豊かな知性と、鋭敏な感性と、理想を求める意志の力との発達が、人間の成長段階に応じて仲よく進行することを助ける教育である。そして、それは、人間を自由で自立的な行動へと導いていく自由への教育である。

いまを生きる若者たちの想像力を解き放ち、かしこさと共に正しさを、そして、ほんとうのやさしさを育てる教育である。

自由の森学園はこのような教育の基礎のうえに、つぎのような営みを充実させる。

●すぐれた構造をもった教育の内容を準備し、発生的・形成的な方法による深く学ぶ授業を創る。

そのことによって、自然や社会や人間についての新しい認識と鋭敏な感受性を育て、理想を求める意志の力をはぐくむ。

●芸術による教育を充実させて、人間の中にある創造的な芽を育て、すぐれた表現をつくりだすことで、生徒ひとりひとりの心とからだを想像と創造に向けて開放し、自由な存在としての自己の形成を助ける。

●教科の知識や芸術の力を総合する総合学習を意図的に展開することで、人間観・世界観など「観」の形成を助ける。

●ものをつくる、動植物を育てる、実際社会のしごとを体験するなど、体験の教育を発展させることで、自我に目ざめ、自然との共感を強め、人間と自然との共生の大切さをとらえることができるようにする。

●構成された劇的活動としての行事や祝祭、学級や学年の自主的な活動、自由で自治的な寮の生活などを充実させることで、他者の発見による自我の自覚と共同性を育て、人間としての自分自身の再発見を助ける。

自由の森学園は、このような教育の事実を創りだすことで、規格化した知識の量という一元的な価値基準で、生徒を優劣に格づけし、選別する能力主義・管理主義の教育を超えて、人間性の本質に深く根ざした人間の教育をこの地上に実現することを目ざしている。

1986年4月

学園長 遠 藤 豊

高校1年生に進化の授業をしている。そこでレポートを書かせる。題は、「進化について」。何でもアリである。中には、「ユニコーンは何類か？」ということを書き寄せてきた者もいる。ユニコーンは、想像上の動物なわけだが、実際、描かれた絵を見るとヒヅメが2つにわれているのだという。つまり、ユニコーンはウマにツノがはえたものではなく、一本ツノのレイヨウであることがわかる。・・・そんな事が書いてある。むろん中には本の丸うつしをした者もいる。図書館においてあったためか、『魚陸に上る』という本から、魚が陸上に上る様子を引用したレポートというのが、ある年にはやった。ある男子が最初にその本をみつけてきて、その後友人達が借用したわけだ。が、丸うつし方式なので読んでいておもしろくない。まだ完全な丸うつしならよいのだが、筋書きだけ書いてあるからなおいけない。・・・ところが、ある時に一人の女子生徒が同じ本をつかって、まったく別のレポートをつくってきた。これは読んでいておもしろかった。本の中に読み手が、のめっているのがあらわれている。これを見て、「これはおもしろそうな本だな」とはじめて思った。そこでさっそく本屋へ行って買うことにした。これが、奥野先生とのあい・・・のはじまりである。僕はだいたい、本は買うと満足してしまうたちなので、しばらくこの本も「つん読(どく)」状態におかれることになった。ところが、レポートを書いた彼女はその後、奥野先生と文通をはじめ、その手紙のやりとりを見るうちに、再び興味がでてきて本を読みだした。そしてついには奥野先生をうちの学校によぼう・・・なんていう話もちあがったのだった。この後の事は、奥野先生自身が書かれるようなので、僕は他の話を書こうと思う。

僕は生物が好きだ。しかし本当にそうなのかはわからない。飼育、ということではてんでダメである。金魚さえまともに飼えない。学園祭の金魚すくいであまった金魚は、まわりまわって我が家にきたものの、半年後にホテイアオイの栄養と消えた。基本的にめんどろみが悪い。というより生来ものぐさなのだ。高1の生徒で、10年間(正確な年数は覚えていないが)アマガエルを飼っている、というSという男がいる。(アマガエルの寿命はまだわかっていないから、記録をどこかに報告してよー会長) もう卒業してしまったが、Hという男なぞは学内でひそかにサキシマハブを飼っていた。こんなのをきくとぼくはただもう感心してしまう。《感心してる場合じゃないよ。サキシマハブが逃げ出したら大変だよ。水族館でエラブウミヘビが逃げ出して大さわぎしたことがあったー会長》 しかし感心ばかりしているのもしゃくなので、絵を描くことにしている。これも、一度手ほどきをしたら、先のHなぞは僕よりもうまく描くようになる。本気でこのライバルの芽を若いうち

につみとろうかと考えたほどだ。《君の芽もつみとったほうがいいかな－会長》
だいたい毎年280人も新入生がくれば、そうした才能は僕より上のやつがいて当然といえば当然だ。したがって今度は絵をどれだけしつこく描きつづけるか、ということに勝負をかけた。今のところ、そこにおちついて安泰でいる。生物が本当に好きかどうかはわからないが、こうしているうちに、どっぷりとはまってしまっていることになる。ここまできると「生物が好きである」ということを信じていないと、本人が情緒不安定になってしまう。何でもかんでも話を生物に結びつけてしまう・・・これが最近の思考パターンとなっている。

その思考パターンの中心となっている生物が、タヌキだ。

先にも書いたが、モノグサ者は飼育だけでなく観察にもむいていない。タヌキを見ている・・・とは他人には言うが、その生きた姿はほとんど見たことがない。えづけされている所へいけば見られるのだが、それもかよいつづける気がしない。夜行性のタヌキを夜道を歩いて捜すのもおっくうだ。何ごと自然のままが一番というリクツをつけて、交通事故で死んだタヌキ 《“自然”やないやないか－会長》の解剖や、タメフン場の中身調べなどをポツポツやっているにすぎない。そのため、動物の個体識別・・・というのには、やっていない者がいづく(?)キョウレツなアコガレさえある。

それでも9年間、ポツポツ資料をあつめていると何となくものが言いたくなくなってしまう。タヌキに関しては本があまりでていないが、その数少ない本の内容につけ加えるような新事実はまるでつかんでいない。何せ巣穴さえ知らないし、見たこともない。(もっともタヌキはササヤブなどを利用し、巣穴をあまりつかわない・・・というはなしもきいたことがあるが。)それでも何かしらものがいいくなるのは、すでに書かれていることでも、自分で実感してしまうことによるらしい。タヌキはルーズな生物だ。シベリアなど北では冬眠するが、本州では冬も活動している。食物も飯能という僕のすむところでは残飯を主流として多種多様。本によればナワバリもいっかげん、という。モノグサ者であるから、何か調べても、はっきりしたことがでてこない(というより、そこまで追求できない)のだが、タヌキはルーズだということを知ると、それを盾にとって、「自然はとらえどころのないものなのだぞ」といいたくなくなってくるのだ。

ものの見方というのはおもしろいもので、一度そんなふうになると、やっぱりそれにどっぷりつかってしまう。

『ファーブル昆虫記』は少年時代、キョウレツな印象を与えてくれた。この本と、岩田久仁雄の『自然観察者の手記』がキッカケで、小学校高学年のときにはハチ採集にあけくれた。もっともチョウではなく、ハチをとってあるいたのは、ホ虫網を持ってなかった僕(田舎町では大きくなってからホ虫網を持ちあるくのは犯罪に等しい。)にとって、手づかみ(けっこうさされたが)や、ピンをかぶせるだけで捕れるといったことも大きな理由であった。が、ファーブルを読んで以来、虫というの

はキッチリはたらくものという思いこみも何となくできあがった。それが、タヌキを見だして、もう一回そんな目でみると、虫にもルーズな面はないのか、というふうに考えてしまえるのだ。このことを、今、オトシブミという葉を巻く虫で考えていけないかと思っている。ただしルーズな僕は今年のオトシブミのシーズンをもたもたしているうちに、ひとつふたつの観察しかできずに終了させてしまった。ルーズさを証明するのにも、ルーズではいけないのである。困ったものだ。

こうした見方、は教師をやっている何となく役にたつ。というのも、案外物事を〇か×か、又は+か-か、みたいなわりきりで見ってしまう事や人が多いのに対抗できるからだ。

うちの学校には中間、期末のテストがない。ついでに、5、4、3、2、1〜とつける通信ボもない。かわって評価表という、教師が各教科ごとにコメントを書くものがある。これのネタ、につかうのが最初に紹介したレポートなどだ。僕の場合、ことし7クラスの授業と選択授業を1つもっている。単純な話、年に2回、このクラスの一人一人、つまり約300人に手紙を書く、という状況になる。これはけっこう地獄である。《楽しんでるくせに=会長》

客観的に生徒の評価をする・・・ということであればテストの方がよいという考えもある。僕自身の出身高校はそうだったらいい。中間テスト45点満点、期末テスト45点満点、平常点10点満点で、この合計が成績となっていた。いわく、英72点、国61点、etc. 笑えるのは体育や美術まで、これにあわせてあるところだった。

これに対し、文章の評価なんて、書く方も、読む方もよくわからない点がある。極端な考えにたてば、評価は生徒自身でおこなうものだから、何もせず、生徒が自分自身で考えればよい・・・ということもありうる。《金沢大学理学部に、こんな先生がいる。試験はするが、全員に優をつけるのである。ある学生がやってきて、「どう考えても、僕の答案は優に値しません」という。先生「では、君はどれくらいやと思うんや」「そうですね。せいぜい良というところですね」「そうか。じゃ、良に突えよう」ことわっておくが、この先生は私ではない。私はこの話を聞いて、「まじめな学生やのに、ちょっと可哀想やないか」と言ったのだが、彼は「いや、本人の意志を尊重せなあかん」と承知しなかった。だが、よく考えてみたら、やはり彼のほうが正しい。本人の意志は、何にもまして大事にすべきである。以後、もし自殺したいという学生が現れたら、足でもひっぱってやろうと待ち構えているのだが、残念ながらまだあらわれない-会長》このまったく点数まかせ、というのと、まったく何ものなし、というのはある意味で似ていると僕は思う。つまりそれはそれで、矛盾が少ないのではないか、というところだ。この中間の、労力ばかりくってよくわからないのが、もう一つのやり方。こうしたことをやっていると、タヌキ的ルーズさ・・・つまり考えてもよくわからんが、考えることにイミがあるのかな状態に、イミをみいだしたくなってくる。そうしてみると、生物を見ていて気が

ついでに、その人のおかれている状況、考えていることは似たりよったりになりやすいということになるのだろうか。

「地球にやさしい」というフレーズは何やらうそくさい。結局「地球にやさしい」といったって、人間が地球を丸ごと破壊できるほど「むごく」はできやしない。人間がいなくなっても地球自体は存在するのだ。《「地球にやさしく」しようと思ったら、人間がいなくなるのが一番だね-会長》 「地球にやさしい」ではなく「人にやさしい」ならわかる。自然保護は本来、「人間本位」で考えていくものではないか。というより正確には人間がやる以上、人間本位でないとウソである。ただ、僕は、自然は大切にしたい。うちの学校の周囲がゴルフ場になるが、やはりこれはいやだ。つまりこのことも、「僕にとって」というのが一番わかりやすく、「人にとって」ではまだわかりにくい。なぜなら、ゴルフ場に関していえば、地元の人には賛成してしまっているのだから。僕としてはかけまわって野山で生物を見ることができなくなるのはイヤだ。都会にいと息がつまる。が、そうではない人もいる。《オレや-会長》 その人達に、そうではない、自然っておもしろいんだぜ・・・ということ伝える。それがまわり道だが一番自分にとってはあつてる自然保護のやり方ということになる。はてしなく、これでは個人主義におちいりそうだが、自分の言うことは自分のエゴにもとづいているんだ、という自覚は大切なような気がする。そしてそのエゴをどれだけ相手に実感してもらえるかがもっと大切なところだろう。もっとも、エゴである、というからにはそのエゴの中身については本人がよく考える必要がある。最近話題となっている昆虫採集肯否論も同じことだ。虫を殺すことで見えることはある。が、それは自分のエゴのために殺してはいるのだ。《学生の頃、紀州白浜の臨海実験所で、友人と二人で潜って魚を突いたことがある。私はタカノハダイ、友人はニザダイ、各一匹ずつ仕留めたのだが、それを宿舎にもってかえって自慢したら、宿舎のおじさんが夕食の煮つけにしてくれた。ところがまずくて食えない。ちょっと箸をつけただけで返したら、「魚は人間に食べられてこそ成仏する。食わないのなら突くな」とさんざん説教された。だから、クモでもアリでもゴキブリでも、採集したら必ず食べることに決めておけばよい-会長》 場合によって可であろうし、場合によっては絶対否であることもあろう。その尺度を他人にまかせたい、論にたよりたい、ということでは、まずいと思うのだ。虫を採るにしろ採らないにしろ悩むことが必要であると僕には思える。つまるところ自然保護も様々な立脚点があつてよい。僕が学校の授業の中で、伝えたいのは、こんなことになる。こんな授業をしていたら、受験にはあまり役にたたないが、将来ゴルフをやるより、山を歩くことを望む生徒でいてほしい・・・やはりこれも自分のエゴではある。そしてこんな理クツよりも、そうした授業の方が僕は好きだというのがもっと本音だ。

小人閑居して・

栗間修平

【1】

今、私は極めて暇だ。と言うのも、昨年二月、長い間の東京暮らしに見きりをつけ、郷里の島根県松江市に引き揚げ、失業生活を続けているからだ。《勤務中でも暇だたくせに－会長。会長よりはいそがしかったよ－栗間》

19の歳に、当時は城の中にあった金沢大学に入学する為に家を出た時の荷物は、蒲団袋と柳行李それにポストンバッグ一つだった。ところが、25年ぶりにUターンする時の荷物はトラック一台分もあった。私はどちらかと言えば無産の民に属する方だと思うのだが、《どちらかと言わなくてもそうだよ－会長》その無産者といえども、25年も経てば結構物持ちになっている。私くらいな年になれば、家を出る時には身一つでも、Uターンする時には女房と子供の一人や二人連れていてもおかしくはない。しかし、何故かそういう類の者は存在せず、荷物は増えても人間は増えず、故郷に戻って来たのはやはり身一つの姿だった。

私の実家は小さい家だ。トラック一台分の荷物を入れ、私がそこで暮らすには少々狭過ぎる。もっとも、昔は家族8人がその家で暮らしていて、それで不便には感じなかったのだから面白いものだ。そこで、実家のすぐ近くにある空家の1軒を借りて私は住むことにした。三度の食事とお茶、そして風呂は実家のオフクロの世話になっている。

私の家の近くには何軒もの空家が存在している。私の住む町には隣保制度というのがあって、一隣保は10世帯前後で構成され、町内会の末端組織を形成している。私の借りた家が属する隣保を構成するのは9軒だが、私がその家に入った時、人が住んでいたのは9軒のうち4軒だけで、5軒は空家になっていた。そのうちの1軒を私が借りたという次第だ。寂しいといえば寂しい限りだ。もっとも、去年から今年にかけて、残る空家4軒のうち2軒にも人が住むようになり、多少は賑やかになった。

しかし、賑やかになったといってもたかが知れている。私の所属する隣保に限らず、近所には老人だけの世帯が圧倒的に多い。私の借りた家の隣は空家で、その隣にはなんと102歳になる爺さんが「若い」婆さんと一緒に住んでいる。子供など、町内中捜しても数えるほどしかない。私がガキだった頃には、うちの近所には掃いて捨てるほど子供がうようよしていたものだった。同じ町内に住んでいた同学年の男子だけでも、当時は野球チームを2チーム作ってなお余りが出るほどだった。もっとも、私は同世代の人間が特に多い所謂“団塊の世代”に属すから、私がガキの頃に近所に同世代の子供がゴチャゴチャしていたとしても不思議ではないが・・・

あの頃の賑わいを今に求めようとしても、それは無いものねだりというものだろう。

とにかく、空家が何軒もあり、人の住んでいる家には老人だけの世帯が多いというのが、私が25年ぶりにUターンした町の現実であり、そんな町に私はUターンした。

【2】

東京の仕事を辞めて郷里へ戻った私は、当然の如く失業者となった。バブルが弾けて世の中不景気風の吹いているさなかだ。地方都市にろくな仕事が転がっているとも思えない。だから、初めから1～2年はブラブラして過ごすつもりだった。

しかし、ブラブラし始めると、このままずっとブラブラしたいという気持ちになってしまった。そんなふうになんか物事を考えられるのも、私が単身者であり、養わなければならない家族というものを持っていないからだろう。

私が郷里へのUターンを決めた時、東京に住む高校時代の同窓生の何人かが異口同音に「羨ましい」という言葉を口にした。

「羨ましいと思うなら、お前もさっさと仕事を辞めて田舎へ帰ればいいじゃないか」と私は言ったのだが、それに対する彼らの返事はこれまた異口同音に「食わせなきゃならん家族があって、おいそれと仕事をかえられない」というものだった。我が日本生物学会の奥野会長は「子供をつくって育てるとするのは懲役20～30年を食らうようなもんやで」とおっしゃるが、けだし名言だ。

友人たちの「羨ましい」という言葉には、幾つかの思いがこめられている。まず、ブラブラ出来ることへの羨望。生甲斐も趣味も仕事という傍から見ていると鳥肌が立つような“仕事人間”も広い世間にはいるかもしれないが、《俺や、俺やー会長》多くの人はそうではない。働かなければならないから働いているというのが実態だと思う。もっとも、中には余計な仕事をして周囲や世間に迷惑をかけ、「何もせずにくれたらいいのに・・・」とまわりから言われることの多い者もいるが・・・。《まさか、私のことではないでしょうね、栗間さんーF女史》それはともかく、仕事に追いまくられずにもっとのんびりしたいというのが、多くの人の本音ではなからうか？ だから、のんびりとブラブラ出来る私が羨ましくもなるのだろう。《いい年齢して、ブラブラのんびりして、精神が安定しているほうが、おかしいんやでー会長》

それに、私らの世代になると、大体親は年をくっている。東京に住む私の高校時代の友人といえ、その殆どが年老いた親を郷里に残したままだ。もっと若い頃であれば、親というのはうるさいだけの厄介な存在だったのだが、子供である我々がすっかり中年になり、親が老境に入ってしまうと、親は心配な存在へと変わってきた。私がUターンを決意したのも、3年前に親父が脳梗塞で倒れ寝たきりの状態になったということが引き金になっている。心配の対象となった親の近くに簡単に戻れる私が、私の友人たちから見れば羨ましくもあるらしい。

さらに言うと、東京は住み易い所ではないと思う。物が豊富にあり、便利な所ではある。また、いろいろと刺激を求めたい若い世代には面白い所かもしれない。しかし、頭に白髪が目立ちだした中年になってみると、家賃が高くて慌ただしいだけの街でしかない。そんな都会の生活に疲れを感じ始めたオッサンやオバサンが改めて“住み易さ”というものを考えるようになるのも当然のことだ。そんな住み難い東京から撤退する私が、これまた羨ましい存在となるらしい。

ところで、私がUターンした島根が住み易い所かどうか？ 以前、総理府かどこかが都道府県別の“住み易さ”の指標のようなものを出したことがある。それによれば、我が島根県は住み易い県のランキングの上位に位置している。政府の言うことは聞きたくもないし信じたくもないが、政府統計によれば、島根県は住み易い所ということになるらしい。その割に、島根の人口は減る一方ではあるが・・・。

私のUターンに対して「羨ましい」という言葉を発した者だけではない。

「お前、今から田舎へ帰ってブラブラしてたら老けこむぞ。」

と真顔に心配してくれた友人もいる。言われて、私も爺むさくなった自分の姿を想像してゾットした。しかし、生来好奇心の強い私はブラブラしながらも、時には天下国家に思いを馳せ、時にはスケベなことを考えながら、今なお老けこんだ気分にはなっていない。

【3】

島根に帰った私は、失業中ということで、雇用保険の給付を受けた。雇用保険は4週間28日毎に支給されるのだが、私の保険の給付額は月額に直すと22～23万円になる。ところが、松江の職安に掲示してある求人票の賃金を見ると、特別な仕事を除いては20万円未満のものが多い。働いて20万円を稼ぐのとブラブラして22～23万貰うのと、どちらが得か。考えるまでもない。《仕事がなく22、3万円しかなかったら、とてもやないけど金が足らんで一会長の、遊び人の息子》

私は元々勤労意欲が薄弱なほうだ。しかも、初めから暫くの間はブラブラして過ごすつもりでいた。だから、20万弱の仕事に飛びつく気持ちはさらさら無かった。雇用保険というのは、働く意志を持つ者に対して支給されるたてまえになっている。しかし、“意志”という人の眼には見えないものを、“ある”とか“ない”とか他人が判断することは不可能だろう。結局、私は7カ月間、雇用保険の給付をうけて結構優雅に暮らした。その優雅な暮らしがすっかり身についてしまい、今では職安に通っていた頃以上に勤労意欲をなくしてしまった。

私が支給されていた雇用保険の金額が松江の職安に掲示されている求人票の賃金よりも高いというのは、都市と地方との賃金水準の格差によって生じたものだ。地方の賃金水準が低いからといって、地方の人間は都会に比べれば相対的に貧乏人が多いかということ、そうではない。むしろ、都会の勤労者に比べれば、安い賃金なが

らも優雅な暮らしを送っている者が多いという感じもする。

先日、鎌倉に住む高校時代の友人が帰省して来て、一杯飲まないかと呼び出された。彼の母親が転んで足の骨を折り、約2カ月間入院していた。それが良くなって退院するというので、彼は帰省して来たということだ。彼の父親は炊事も洗濯もしない人だそうで、母親が入院している間、その父親は自宅を離れて老人マンションに入っていた。その老人マンションは、一室が8畳より広いスペースで三度の食事つき、風呂は共同浴場ながらも朝から晩まで好きな時間に入ることが出来るという施設らしい。その家賃が、食事代も入れて月額8万円。彼は、退院する母親も完全に良くなって買物等にも自分で行けるようになるまでそこに入居させると言っていた。

その時も話に出たが、東京近辺で同じような施設を捜せば、もっと狭いスペースで月額20~30万は恐らく負担しなければならぬだろう。いや、もっとポラレルかもしれないという話になった。三食つきで月8万円の老人マンションが存在するのも、地方ならではのことだ。

地方で安いのは家賃ばかりではない。私はUターンして間もなく、必要に迫られて自動車の運転免許を取った。これは後述するけど、中年になってからの免許取得は考えていた以上に苦労だった。ところで、その免許取得の為に自動車学校卒業までにかかった費用だが、私の場合、数時間の補習費用も含めて20万円から少しおつりがくる金額だった。ある友人の話では、東京で免許を取るとしたら補習代を除いても「20万やそこらではきかない」ということだ。

セコく金のお話を書いたが、東京と地方とでは賃金水準に大きな較差がある。ところが、その賃金水準の較差ほどには生活水準に較差はない。むしろ、生活水準は地方の方が高いような面も見受けられる。この現象はどこから生じるのか？ 都会では高収入高支出の生活が営まれ、それに対し地方では低収入であってもそれに合わせて支出も少なく暮らすことが出来るという違いがあるからだろう。おかげで、雇用保険の給付が切れた後はろくな収入が無いにもかかわらず、私も切羽詰った感じになることもなくブラブラしていることが出来るという訳だ。

ブラブラしながら食っていけるとはいうものの、私も先行きに不安が無い訳ではない。ところが、働いて稼ごうという気持ちとはんと湧いてこない。このまま働かずに、それでいて先行きの不安を解消する手立てはないものか？ そう考えた私は、大学時代の友人の一人にその相談を持ちかけた。その友人は石川県庁に勤めており、長いこと福祉関係の仕事に携わっている。

「車を持っているから生活保護は無理としても、俺みたいな人間を養ってくれる福祉の制度というものは無いものかな？」

その私の質問に対する彼の答えはつれないものだった。

「お前みたいな人間を働かせるようにするのが福祉の仕事であって、お前を養う

のが福祉の仕事ではない」

私は怯まずに食い下がった。

「俺を障害者として認めて貰えないかな？ 数年前に肺を切った時の傷跡が背から脇腹にかけてきれいに残っているし、脛にだっていっぱい傷を持ってんだから・

それに対して彼は一言「ダラ！」と言っただけだった。「ダラ」というのは、関東では「バカ」、関西では「アホ」という言葉の同義語で、主として北陸から山陰にかけて使われている言葉だ。それが関西弁と合体すると「アホンダラ」となる。

働かずに食ってやろうという私の虫のいい考えは彼のつれない言葉によって打ち砕かれてしまった。つれないのは彼だけではない。彼の高校3年生になる娘はもっとつれない。昔、彼女が幼かった頃、私は遊びたくもないのに一緒に遊んでやったものだ。ところが、最近の彼女は私とはちっとも一緒に遊んでくれない。昔同様に、私は相撲をとったりプロレスごっこをして一緒に遊びたいのに・。《ダラッ！ - 会長》

【4】

先ほどから、「ブラブラしている」「ブラブラしている」と書いてきた。間違っているではないが、Uターン以来何もせずにブラブラしている訳ではない。車の運転免許を取る為に自動車学校へも通ったし、約半年かけて親父の俳句集の編纂もした。病院に入っている親父の看護もすれば、オフクロのアッシー君の役割も果たしている。

地方で暮すには、車の運転免許を持っていないと非常に不便なことが多い。そこで私も一念発起して免許を取ることにした。皇太子妃と同じ名前を持つ金沢大学のF女史ですら運転免許を持っている。俺に取れない訳がないと思った。もっともF女史は補習を21時間受けたらしいが……。《馬鹿にしないですよ。27時間よ - F女史》

私の自動車学校への通学が始まった。最初のうちはその通学も苦ではなかったが、そのうちだんだんと嫌気がさしてくるようになった。やはり中年ともなると、運動神経を含めていろいろな面で衰えが出ているようだ。《中年、中年とえらそうにいうな。おれが免許取ったのは、52歳だぞ - 会長》 操作が遅れたり、忘れたり、間違ったり……。その度に指導員からは小言を食らう。小言の中には食らって当然のものもあるが、何で小言を言われるのか私には理解できないものも結構あった。それでもじっと耐えながら講習を受け、無事仮免を通過した。

路上教習が始まって何回目かに、私の隠忍自重も限度を越えてしまった。松江市の外れの田舎道を走っている時だった。向うからバスがやって来た。道はさほど広くなく、無論車線など引いてない。見ると、すぐ目の前に商店があり、その商店の前は車が入れるほどの空き地になっている。恐らく、その店へ買物に来る車を停める場所だろう。私は狭い道でバスと安全に擦れ違うにはその空地に車を乗り入れる

のが一番だと思った。そこで、その空地に車を乗り入れてバスの通過を待った。私は正しい処置をしたと思って良い気分でした。ところが、それは路上教習中にはしてはいけないことだったらしい。隣に座っていた指導員は、

「ここは道路外だよ。何でこんなことをするんだ？」

と小言をたれた。私は間違っただけをしたつもりはなかったので、バスと安全に擦れ違ふ為だと答えた。すると彼は、路上教習中に指導員の指示なく道路外に出てはいけないと言う。私はちょっとムッときた。

「それだったら、その旨を前もっておれに言うておくのが筋だろう。それをあんたが俺に教えていないから、それで俺は正しい処置だと思ってここへ入った。それをつべこべ文句言われたら、俺だって怒るぞ。」

私は言い返した。すると彼は、

「もしここに壁があったらどうするつもりかね？」

と言う。私はカチンと来た。

「何？ 壁？ 壁なんてどこにあるんだよ！ 壁があればその壁に沿った場所に車を停めてるよ。壁が無いからここへ入れたじゃないか！ 無いものがあるように仮定してものを言うんじゃないよ。」

そしたら彼は、あらゆる状況を想定して車は走らさなければいけないと言う。私はこいつ屁理屈を言っていると思ったので、屁理屈には屁理屈で応えることにした。「そうかい」と言って私は車を発進させた。そのスピードは微速に近いノロノロ運転だった。

「もっとスピードを出して！」と叱声がとんだ。私は答えた。

「あんた、さっき、あらゆる状況を想定しろと言ったじゃないか？ あらゆる状況を考えれば、今地震が起きて目の前の道路が陥没することだってあるかもしれない。そんなことを考えたら、普通の速さで車を走らすことなど、とても恐くて出来ない相談だ。」

彼は黙ってしまった。卒業検定までの路上教習の残り時間は少なくなっていたが、彼は二度と私の運転する教習車には乗らなかった。

そんなこともありながらも、私は無事運転免許を取得した。

嫌気がさしながらも、それでも免許を取るまで自動車学校へ通い続ける私の心の支えとなっていた要素は幾つかある。今免許を取っておかないと後で困るという気持ちもあった。運転免許取得に挑戦しながらも途中で挫折したというのでは、奥野会長や皇太子妃と同じ名前を持つF女史 《いちいち、皇太子妃を引き合いに出さないでよ。そうでなくても迷惑してるんだから—F女史》 の嗤い者にされてしまうという恐怖心もあった。しかし、それ以上に私の心の支えとなっていたものはもっと即物的なものだった。

自動車学校には若い娘が沢山通って来ている。その若い娘たちと親しくなりたい

というスケベ心が私の向学心ならぬ通学心を支えたのだった。実際、若い娘と親しくなろうというスケベ心でも持っていないと、嫌気の方が先に立ってしまうだろう。おかげで、私は何人かの若い娘と多少は親しくなることも出来、路上教習で指導員に向かって唖阿を切ったような話をして、拍手されたりもした。また、路上教習中に、対向車線を走って来た同じ教習所の若い娘の運転する車に手を振って指導員から小言を食らったこともあった。

先ほど登場願った石川県庁に勤める私の友人は、私が運転免許を取得したのに刺激され、今自動車学校へ通っているらしい。この前金沢へ遊びに行った時、私は彼にアドバイスした。

「そのうちに嫌気がさしてくるぞ。そんな時に、若い女の子と仲良くなってでもおかないと、続けていく気力が湧いてこなくなるぞ。」

「ほ、そうか。そ、そ、それで、どうやったら、若い娘と仲良くなれるのか？」
彼は興奮したり緊張したりすると吃る癖がある。暫く、会話が弾んだ。ところが、私が彼にアドバイスした場所が悪かった。彼のカミサンが運転する車の中だった。

「ちょっと、あんたら。そんな話がしたかったら、車を降りまし。」

自動車学校ではスケベ心を沸き立てるべしという私のアドバイスは、彼女の機嫌を害ねたようだ。それで、私も彼も口を噤んだ。給油の為に立ち寄ったガソリンスタンドで、

「ゴミはありますか？」と聞いたスタンドの従業員に彼女は言った。

「粗大ゴミが二つ。」

【5】

郷里へUターンした後ブラブラしている私は、我が日本生物学会では100円会員ということになる。

昨年秋、「日本生物学会誌」31号が送られて来て、振替用紙も同封されていた。財政も赤字になり、我が日本生物学会がまさに“危急存亡”の秋を迎えている。私はすぐに郵便振替で100円を送ろうと思った。だがその直後、送金をためらう気持ちは頭を擡げてきた。

東京に住んでいた頃だったら、恐らくこのためらいは生じなかつただろう。振替用紙と100円、それに手数料を持って郵便局へ行けばそれですむ。事情は松江でも同じだが、その郵便局へ行くのに根性と決断がいる。といっても、田舎で郵便局が近くに無いというのではない。私の家から200mばかりの所に郵便局はある。その郵便局へ行くのに、根性と決断を要した。

その郵便局は所謂特定郵便局といわれる小さな郵便局だ。窓口にいない局長とは挨拶も言葉も交わしたことはないが、その局で働いている女4人男2人の職員とは、私は顔馴染みになっている。

Uターンして間もなく、私は郵便貯金の住所変更の手続きを取る為、その郵便局

に顔を出した。その数日後、オフクロがその郵便局に立ち寄った時、そこの職員に、「息子さんがお帰りになられたようですね。」

と言われたそう。私の苗字が世間にはあまり無いものなので目立つからだろうが……。ちなみに、「栗間」という苗字は、明治になって民百姓が初めて姓を名乗ることを許された時、栗の木の間に家があるからということで極めて安直につけた名前らしい。従って、子孫の中に私のような安直な人間が生まれ出たのもいたし方ないことだ。親父の実家のある田舎へ行けば栗間姓の家も何軒かあるらしいが、松江では珍しい。松江の電話番号簿に載っている「栗間」は二つしかない。一つは親父の本名が載っており、もう一つは親父の俳号が載っている。要するに、住所も電話番号も同じで、一人の名前が二つ載っているということだ。

その後も、私は様々な用事があって何度もその郵便局に顔を出した。「日本生物学会誌」31号が送られて来た頃には、毎日のようにその郵便局へ通っていた。郵便局でアルバイトしていた訳でもなければ、強盗の機会を窺っていた訳でもない。Uターンして以来私が編纂を手懸けていた親父の俳句集が「日本生物学会誌」31号の届く少し前に完成し、それを各方面に送るという仕事があったからだ。

親父の俳句集の刊行は地元の地方新聞でも報じられ、それなりに反響があった。その郵便局でも、私が書籍小包として持ち込んだ俳句集を手にして、

「新聞に載ってましたね。これがその本ですか？」

と職員の一人が言った。その頃毎日のように郵便局へ通っていたということもあり、私はその郵便局の職員たちとはすっかり顔馴染みになってしまっていた。そんな郵便局の窓口から100円玉一つを振替で送ることに、私はためらいを覚えた。私は至って気の小さい男だ。「100円ですね」と嬉しそうに言う郵便局員の顔が思い浮かぶだけで、気恥ずかしさを感じてしまう。

私は悩んだ。いっそのこと1000円送ろうかとも思ったが、定職を持たないにもかかわらず定職に就いているように見栄を張るのも嫌なことだ。《見栄張ってもいいよー会長》しかし払うべき会費は払わなければならない。ウジウジしていてもしょうがない。私は意を決して郵便局へ行くことにした。その日に発送すべく梱包した書籍小包も幾つかあった。

郵便局へ行き、振替用紙に金額を書き込む段になって、私は妥協案を思いついた。何も1年分を送ることはない。翌年も恐らく定職には就いていないだろう。だったら2年分をまとめて送ればいい。200円を送れば、顔見知りの郵便局員の前に100円玉を一つ差し出す気恥ずかしさから少しは逃れることが出来る。そこで私は会費2年分をまとめて送ることにした。《どうせ送るなら10年分くらい送れよ。ケチめ。100年分でもよかったのにー会長》

私が200円の金額を記入した振替用紙を窓口差し出すと、窓口で座っていた女子職員は笑顔を作り、りんとしたよく通る声で言った。彼女は普段と変わらぬ普通の声を出したのかもしれないが、私にはいつも以上の大きな声に聞こえた。

「お送りになるのは200円ですね？ 手数料入れて260円いただきます。」
私は心持ち顔を赤らめ、彼女の前に260円を差し出した。

しかし、僅か100円の金を送るのに、こんなに思い悩み決断を下すのに時間がかかるというのは、私には初めての経験だった。

【6】

こんなことを書いているうちに衆議院が解散し、総選挙ということになった。

何と言っても島根全県区は悪名高き竹下登の地元だ。私がこの島根で選挙権を行使出来る初めての衆議院選挙ということになる。実は、前回の衆院選の時も、私は島根にいることはいた。その時は体を悪くして松江の病院に入院していた時で、私が投票権を行使出来る選挙区は東京六区だった。病院での入院患者の不在者投票はどういうふうにしてやられるのか見てみたいという野次馬的な興味もあって、私は島根で東京六区の子選挙の投票を行なった。

私は議会を通して世の中が変わることなどないと思っているから、これまでの多くの選挙、大は国政選挙から小は地方議会の選挙にいたるまで、棄権することも多かった。《つい昨日、金沢大学の学長選挙に棄権してやった－会長》ところが、選挙を通して人民政府が樹立されるということはあるにあり得ないことだとしても、選挙を通して世の中が悪く、と言って悪ければ、私の気に染まぬ方向へと変わっていくということはある。現実に金権腐敗政治が罷り通っている。それに些かなりとも異議をさしはさむ為には、選挙での投票権の行使というのも一つの手だ。私も、昔のように「実力阻止」とか「粉碎」を叫んで棒を持って走りまわる元気も若さもなくなった。そこで最近では“反自民”の票を投ずる為に、投票所へ足を向けることが多くなった。《おれはまだ行ってないよ。若いかな－会長》

“反自民”の票ということで社会党に投票することもあれば、ミニ政党や所謂泡沫候補と呼ばれる人に投票したこともある。私が社会党に投票したのは、決して社会党を支持しているからではない。それでも、多少は社会党を支持したい気持ちもあった。と言うのも、社会党という党はあまり頼りになる党ではないが、それでもこれまで万年野党としてそれなりの筋を通してきた面もある。

4年前に、リクルート事件という政治腐敗が露呈するとともに消費税が導入された折、一斉に自民党への反発が強まり、社会党に追い風が吹いた。その時追い風が社会党に吹いたのは、万年野党として反自民の姿勢を曲がりなりにも貫いてきた社会党に、驕る自民党政権と対決する姿勢がどうかこうにか見られたからだ。

しかし、追い風に煽られた社会党は妙な方向へと飛んで行った。もしかしたら政権が社会党に転がり込むのではないか、あるいは社会党を軸とした連立政権の誕生も夢ではないのではないか。政治の舞台は同時に権力闘争の舞台でもある。追い風に煽られた社会党が政権獲得に色気を見せたのも無理はない。万年野党であり続けたのも、自らが望んでその地位に甘んじてきたことではない。長い間待ち続けでき

た政権獲得のチャンスが巡ってきたなら、断固としてこれまでの主張を押し進め、社会党政権が誕生すれば腐敗した自民党政治とは一味も二味も違うという姿を国民の前に指し示せばよかった。

ところが、政権に色気を見せた途端、社会党内に台頭したのは“現実路線”への転換の声だった。その現実路線というのが、現実に存在する大衆の不満を吸い上げ、政治不信を打開するものならば言うことはないのだが、社会党内に台頭した現実路線への転換の声は、現実の政治にすり寄って行くことでしかなかった。現実の政治にすり寄るといことは、とりもなおさず長い間独占的に政治支配を続けてきた自民党によって築かれた現実にすり寄ることを意味する。実際に、現実路線への転換という声とともに社会党内に立ち現れたのは、自衛隊容認、原発容認、さらには憲法見直しの論議だ。これでは、自民党の政策と変わらないことになる。もちろん、憲法見直し等の主張には、社会党内にもそれに反発する声がかき起きているようだが・

今回の衆議院解散には、自民党分裂というオマケまでついている。しかし、内閣不信任決議に賛成票を投じ、自民党を割って出たグループが自民党とどう違うのか、私にはわからない。《わかってるんやろ。こういうのを「白々しい」言い回しと言うんやー会長》政治改革を推し進めると称する羽田派“新生党”などというものは、元々は竹下・金丸につながる、かつては自民党主流派をなしていた連中だ。旧竹下派内部の竹下後継人事をめぐる小淵派と分かれ、その挙げ句に自民党を割ってでた連中に過ぎない。政治改革の論議は、本来は竹下・金丸に象徴される政界の金権腐敗を改革する為に引き起こされたものだった。ところが、その論議はいつの間にか選挙制度改革にすり替えられ、羽田派がその「旗手」を務めるという茶番になってしまった。

今度の衆院選で“台風の目”となるのは日本新党だと言われている。が、この党も私にはよくわからない党だ。この党が他の諸政党と違うのは、“地方分権”ということを強調している点だろう。私も中央集権体制よりは地方分権でいった方がいいと思っているが、しかしこの日本で曲がりなりにも地方分権体制を構築するには、官僚制度の抜本的な改革が必要だ。ところが、日本新党が官僚制度の抜本的改革を唱えているという話は聞かない。

島根県出雲市に岩国哲人という市長がいる。この市長は日本新党の細川と共著を出したりしていることもあり、日本新党に近い立場の人間だと見られている。私はこの岩国の打ち出す斬新でユニークな施策にはそれなりの関心を持って見ている。大学駅伝を持って来たり、“出雲ドーム”という木造のドームを作ったりして人の目を引く興行師的政策を打ち出す一方で、地域と密着した様々な行政を展開している。例えば、出雲市の商店街を歩いてみると寂れており、爺さん婆さんが買いそうな物しか置いてない。もしここを女子大生が歩くようになれば、商店街は活性化するに違いない。そこで女子短大の誘致を唱え、折から社会問題となっている看護婦

不足の問題も合わせてセットして、2～3年後に開講する県立医療短大を出雲市に誘致することに成功した。また、老朽化した小中学校を木造校舎に建て替えるということも行なっている。これは、冷たいコンクリートの中ではなく、柔らかな木の香りのする校舎で子供達に学ばせたいという情緒的な側面もあるが、そればかりではない。廃れ行く島根の森林業にもう一度活を入れるという意味もある。さらに、公務員の週休二日制の実施に伴って市役所は土曜日も休みになる。それで困る住民も出てくる。そこで岩国が打ち出したのは、スーパーや農協の支所の一角を借りて市役所の業務、とりわけ住民票の交付や出生届といった「市民課」の窓口を土曜日にも開けておくというやり方だ。住民は平日にわざわざ休暇を取って市役所まで足を運ばなくても、土曜日に近くにあるスーパーや農協の支所で出生届等の手続きを取ることが出来る。

こういった岩国の施策は物珍しさも手伝って住民にも評判はいいのだが、それが現在のところ巧くいっているのは、出雲という地域に限定して政策が展開されているからだろう。これが国政の場にまでひろがれば、恐らくそうすんなりと話は進まないと思う。

日本新党の細川は、かつて熊本県知事として独自の行政を展開しようとしたのだが、中央政権の厚い壁に阻まれて思うようにことが進まなかった。そこで、中央の政治を変えることによって地方行政の独自展開を可能ならしめようと考え、“地方分権論”を引っ下げて日本新党の旗揚げをしたものらしい。しかし、彼の地方分権の主張は、昔の殿様の血を引くだけに子孫の自分も殿様になりたいと言っているだけのものにしか、私の眼には映ってこない。政界再編の波の中で、あわよくば“將軍”にもなろうというイロ気もこの頃では見え隠れしている。

そんなこんなで、今私は今度の選挙をどうしようかと悩んでいる。《「どうしようか」と思っていることはホントやけど、「悩んでいる」というのはウソやー会長》

竹下を初めとする自民党系の候補は論外としても、社会党にもすっきりしないものを感じる。いっそのこと共産党にでも投票しようかとも考えるが、共産党には昔からの因縁もあって票を入れる気にはなれない。それではどうするか。棄権するか、それとも白票を投じるか、あるいは無効投票になるけど投票用紙に「竹下のバカヤロー！」とでも書いてくるか？ 《もうちょっと気のきいたこと、書いてこいよ。まだ皇民党の方がしゃれてるよー会長》

恐らく、この「論文」が「日本生物学会誌」に載る頃には、衆院選も終わっており、自民党単独支配に代わる、それでいてあまり代わり映えのしない新たな政治体制がスタートしているだろう。この選挙を“禊ぎ”と位置付ける竹下はまた上位当選を果たし、佐川急便問題・皇民党事件といった竹下をめぐる疑惑の数々もいっしょにか闇の中に葬られることになるだろう。

【7】

昨年二月、私は25年ぶりに郷里の松江市にUターンした。このことは初めに書いた。しかし、松江市は私の生れ故郷ではない。私が生まれた所は、島根県飯石郡三刀屋町という所だ。4歳までをそこで過ごし、それ以後松江に移り住み、4年間の高校生活を卒えるまで松江で暮らしていた。留年した訳でも、途中で転校した訳でも、定時制高校へ行っていた訳でもないが、とにかく私は高校には4年間通った。

それはさておき、私が三刀屋町で襦袢《むつき、と読む。オムツのことです＝編集局・注》をしながら寝小便をたれていた頃、三刀屋町の隣にある掛合町の中学校に竹下登という教師がいた。この先生は、その後県会議員になり、さらには衆院選に打って出て当選し、見事代議士センセイとなった。

竹下が初当選した頃、私は小学生だったが、その時のことは記憶にある。どんな記憶かという、選挙違反者を大量に出したという記憶だ。金をばら撒き、大量の選挙違反者を出しながらも、ここに青年代議士＝竹下登が誕生した。

竹下が国会の赤絨毯を踏み、陣笠議員として活動を始めた頃、当時の私たち島根の子供の間では、別の竹下の方が人気のある存在だった。この竹下は島根県出身のプロ野球選手で、捕手として巨人に入団したのだが、一軍の試合に出ることは滅多になく、二軍暮らしを続けていた。そして、川上が巨人の監督に就任した時、トレードで近鉄に移籍した。と言うより、巨人をお払い箱になり近鉄に拾われたと言った方が正確かもしれない。ところが、近鉄に移った竹下は試合に出る機会を掴むやボカスカと打ち始め、一時は打撃成績のトップを走る勢いだった。当時の島根の野球好きの少年がこの竹下の活躍に熱狂しない筈はなかった。しかし、この竹下選手はそのうち打てなくなり、そして萎んでいってしまった。

それから幾星霜、代議士センセイの竹下は萎むどころかますます面の皮を厚くし、宮沢喜一・安倍晋太郎とともに自民党の“ニュー・リーダー”として持て囃されるようになった。

これを書いている最中に、島根県益田市に出来た石見空港が開港した。この空港は、島根県西部から山口県の日本海側にかけては空港が一つもないということで島根県が建設を進めていたものだ。この空港の建設が始まった頃には、国から幾らでも金が出たという話だ。時の首相が竹下、蔵相が宮沢、そして自民党幹事長が安倍だった。この三人の出身地は、それぞれ島根・広島・山口であり、お互いに相隣接しあう県同士だ。

田中角栄は一人で自分の選挙区・新潟三区へいろいろなものを持って来て、それが権力を利用した利益誘導政治として非難を浴びた。ところが“ニュー・リーダー”三人組はお互いに手を組み、ちゃっかりと利益誘導を計り、そして地勢的にもそれが出来る関係にあった。地元への公共事業が増えれば、土建業者が儲かる。田中角栄はかつて“土建屋内閣”と揶揄され、金丸が摘発された後、山梨の建設業団体にも捜査のメスが入った。島根の建設業者は竹下傘下に入っていなければ仕事が出来ないということだ。

首相就任以降の竹下の行状は周知の通りだ。もっとも、明るみには出ず、今なお闇の中に潜む疑惑も数々あるだろうが・・・。

竹下が首相に就任しようとした時、例の日本皇民党による“ほめ殺し”事件が起きた。それを押え込む為に暴力団が介在したということで、竹下と暴力団との癒着が問題となった。そして、何故“ほめ殺し”を押え込まなければならなかったかということで、“金屏風疑惑”という新たな疑惑まで浮上した。ところで、四国に本拠を置く日本皇民党という必ずしも大きいとは言えない右翼団体が、何故“ほめ殺し”という行動に打って出たのか？ いろいろな理由があるらしい。

私の家から宍道湖の畔を20分ばかり歩いた所に、“仁義社”という右翼団体の建物が建っていた。この仁義社の親分は安藤という男で、何年か前、日教組大会に爆弾だかピストルの弾だか忘れたが、とにかくそんな物騒な物を送りつけた後、自害して果てた。その後、仁義社は潰れたかどこかへ移転したか知らないが、今はその建物は取り払われている。その仁義社に竹下から金が出ていたという話だ。ところが総理就任を目前にして竹下は仁義社への資金提供を打ち切った。総理就任にあたって、右翼との癒着を取り沙汰されないよう身をきれいにしておこうと考えたのかもしれない。仁義社の安藤と日本皇民党の稲本総裁とは昵懇の間柄で、皇民党が“ほめ殺し”の拳に出たのは、他の理由に併せて、仁義社への資金提供打ち切りに対する嫌がらせあるいは再度資金提供を迫る狙いもあったと言われている。

右翼に資金を提供し、そして様々な疑惑が指摘されている竹下の評判は、ここ島根でも必ずしも良くはない。竹下の実家は掛合町にある造り酒屋で、“出雲誉”という銘柄の酒を出している。その“出雲誉”の売れ行きもあまり芳しくないということだ。それでも選挙をすれば多くの票が集まるといのは、どういうことなのか私にはわからない。あれほど汚濁に塗れながらも、なお竹下を「神様」のように思う者もいるのだから、困ったことだ。

【8】

竹下を神と思うか疫病神と思うかは別として、我が島根とりわけ出雲地方は神様の集まる所だそう。旧暦の十月を“神無月”と言うが、ここ出雲地方では“神有月”と呼ぶ。八百万の神々が、旧暦の十月に出雲の国に集まって会議を開くそうで、それでその名がある。私の親父の俳句にも「神集う国原雲の彩深し」というのがある。

しかし、八百万の神々の中にはろくでもない神もいるようだ。

私が卒業した高校の近くにY神社という神社がある。その神社の裏にある森は鏡の森と呼ばれ、その昔、スサノオノミコトがヤマタノオロチを退治した時にクシナダ姫を隠した所と言われている。そんなことでY神社は古い歴史を誇る由緒ある神社ということになっている。

鏡の森の中には鏡の池という小さな池があり、そこに紙を浮かべその上にお金を

乗せて沈めると恋が実するという話だ。池と言っても、直径2 mばかり深さもせいぜい1 mほどの水溜りに毛が生えた程度の小さなものだ。私も恋多きと言うよりも片想い多き多感な高校生活を送ったが、何度その池の前に立っても、その池に金を沈める気にはならなかった。本殿の前にある賽銭箱ではもの足らず、こんな水溜りにまで金を入れさせようとする。ここの神主はガメツイ奴だ。そう思っただけだった。《そんなこと思うから、いまだに崇ってるんだよー会長》

そのY神社の神主の弟というのが私の高校3年生の時の担任教師だった。大法螺吹きで、生徒たちからは人気がなく、私とも相性が合わない先生だった。Sというその先生は、私が高校を卒業して10年も経った頃、教職を捨て県会議員選挙に打って出た。Sが県議選に立つという噂を聞いた時、私は「また法螺が始まった」と思ったのだが、立候補するというのは法螺ではなく、本当に自民党候補として立候補した。そして選挙運動では散々に法螺を吹いて回ったらしいが、最下位で見事に落選した。一度で懲りればいいものを、4年後の県議選にまた立ち、また同じ憂き目を見た。

私の甥や姪のうち5人は私の高校の後輩で、二人の甥は私と同じ道筋を辿って高校に4年間通った。その甥の一人の高校4年の同級生に東大進学を目指す少年がいて、彼は既に教職を退いていたSの家に下宿していたそうだ。Sの家に下宿していた生徒は他にもいたが、その東大を目指す生徒だけは下宿で別格の優遇を受けたという話だ。その話を甥から聞いて私は、Sならそんな差別的なことをやりかねないと思った。

そのSは、同じ自民党でも竹下派ではなく、桜内系だそうだ。島根は竹下登の地元であると同時に、衆議院議長・桜内義雄の地元でもある。この桜内もいい加減な男だ。前回の衆院選には、高齢を理由に「今回は最後」と言って出馬した。そして衆議院議長に就任したのも、長老に“最後の花道”を飾らせるという含みもあったということだ。ところが、今回またまた性懲りもなく立候補している。あの議長の椅子は座り心地の良い椅子かもしれないが、ジイサンいい加減にしろと言いたくもなる。日本生物学会の本部には「一度座ったら二度と立ち上がれなくなる椅子」も存在しているが・・・。

さて、話を神様のことに戻そう。

何年か前、年末年始の休暇で帰省した私に、姉が厄払いして来るように勧めた。その年、私は厄年で、高校の同期生たちが正月にまとまってY神社に厄払いに行くらしいのであんたも一緒に行ったら・・・ということだった。私は即座に答えた。

「何？ Y神社？ 冗談じゃない！ Sの所じゃないか。あんな所へ厄払いに行ったら、厄を払われるどころか、逆に厄を付けて帰されるのがオチだ。」

それで私は厄払いには行かなかった。日本の神であれ外国の神であれ、元々私は神様というものを信じる気持ちがない。神様を信じる気も無いのに、選りに選ってSの実家のY神社へなどお祓いに行ってきたまるかという思いだった。そして私が厄

払いをうけに行かなかったのは正解だったようだ。

その時厄払いに出かけた者の中には、私が言った通りに厄を付けて帰されてしまった女性もいた。彼女は厄払いを受けた1週間か2週間後に交通事故で嘔死してしまった。この先は少々オカルトめいた話になるのだが、その時一緒にY神社へお祓いを受けに行った連中は記念写真を撮ったらしい。その写真に、一緒にお祓いをうけた筈の彼女の姿が写っていないということだ。「写真を撮る時にたまたま彼女はその場にいなかったのではないのか」と私は言ったのだが、その場にいた一人は「そんなことは絶対に無い」と言い張っている。

今、町の中で車を走らせていると、時々Y神社のワッペンを貼った車を見かけることがある。Y神社で交通安全のお祓いを受けた車だろうが、そんな車を見かけると、私はつい「ご愁傷様」という気持ちになる。

今、若者の間では宗教が一種のブームらしい。信じられる社会思想というものが見当たらない今、宗教がそれなりの影響力を持つのもやむを得ないことかもしれない。しかし、数多く神様の中にはろくでもないのやインチキなものもあるから、そんなのには引っ掛からないように気をつけた方がいい。一番いいのは「触らぬ神に祟り無し」で、神様に近づかないでおくことだ。

しかし、ここ出雲の国には旧暦の十月になれば八百万の神々が集まって来る。島根県の人口は70万余り。そのうち出雲地方には40万ばかりの人が住んでいる。そんな所へ八百万の神様がやって来るのだから、住民一人あたり20の神様を相手にしなければならない計算になる。触りたくなくてもついうっかりと神様に触ってしまうこともあるかもしれない。

(1993年7月4日)

大学における学生の地位
—新進気鋭の大学教官は、今、何を考えているか—

奥野良之助

(1)

最近、きわめておもしろい文章が見つかったので、紹介しておこう。これは、この6月に出版された『金沢大学理学部・教育と研究の現状と展望』(Vol. 1, 1993) という“大”冊子のなかに、ある学科の「学生の生活指導」として書かれたものである。少し長いが、全文引用しておく。

《学生の生活指導》

新入生に対しては、学科紹介(入学式の翌日開催)の折に教室主任、学生委員から口頭で生活上の諸注意を与えると共に、さらに新入生と学科教職員全員の茶話会形式のオリエンテーション(1992年度から実施)を行って指導を開始している。このような指導法の効果を明確に把握していないが、無意味とは考えていない。さらに、教養部から専門課程に進級してきた学生に対しては、新入生に対するのと同様の諸注意を与えると共に、厚生補導特別企画の行事を全教職員・学生の参加のもとで実施して人間的な触れ合いを強くするなかで生活指導の糸口としている。その後は、講義や実験の担当教官が生活指導の側面についての助言・指導の中心的な役割を担っている。また、学科教職員・学生全員が出席する(但し、問題児は出席しないことが多い)卒業生・修了生送別会(通称追いコン)とその後の二次会で教職員と学生の人間的な触れ合いをさらに強めていることは、生活指導の授受がスムーズになると言う観点からも意義深いと考えられる。講座に配属された学生は、教官の性格等による若干の差はあるかも知れないが、最も濃密な生活指導を受けることになる。そのような結果として、さらに大部分の学生は本学あるいは他大学大学院へ進学し、また希望の企業の主に研究開発部門、研究機関、教職関係等に採用され、高い評価を受け、かつ高い指導的地位で活躍している。

教官側から感じられる近年の生活指導上の一つの障害は、学生間の間違った(あるいは不正確な、あるいは柔な方向に墮落するような)情報の、特に下級生に染み込んでしまった悪影響である。学生の生活時間の中では、教官とよりも学生同士で過ごす時間が長いということを克服する術は見い出せないが、短時間の付き合いでも如何に教官側から有効な生活指導をするかをもっと研究する必要がある。生活が乱れていれば、それはほとんどダイレクトに学習態度・成績に反映されるので、教官としては学生の生活面の動向に相当神経を配る必要があり、感覚を研ぎ澄ましていなければならない。また、生活指導(学習指導と表裏一体)上かなりの問題が

ある学生に対しては、学生委員、教務委員や指導教官が協力して父兄とも連絡を取り合い更生の道をさぐることになる。なお、問題児のほとんどの父兄は、教官から知らされるまで学生の実態を知らず、その間に転落の深みにはまってしまっているので、やはり、早期発見・早期対処が鍵であるが、なかなかそこまで教官の手が回らない。転落した学生を更生させることは、かなり消耗する仕事であるが、しかし、道を踏み外してしまった学生を更生させたときの教官・学生・父兄共有の喜びを思い出しつつ、指導を行っている。このようにすることで、必ずしも学生の更生に成功している訳ではないが、今までの例では、父兄の協力のもとでの我々の努力はかなりの高率で成功している。学生と言えども成人であり、こんなにまでしなければならぬのかという疑問もあるが、転んだ学生を一度は助け起こしてみる価値はある。しかし、一度助け起こしてもまた転ぶようであれば、再度助け起こす気持ちはほとんど無くなる。

なお、課程区分の廃止に伴い、入学時から卒業まで学部教官が学生の生活指導に当たらなければならないと考えており、指導体制の見直しをしているところである（例えば、学生委員二人体制など）。一方で、入学時から約1年間程度しっかりと生活指導をしておけば、以後は比較的軽微な指導で済むかも知れないという見方もある。従来の経験によれば、転落の端緒のほとんどは教養部時代の過ごし方にあると考えられるからである。

古き良き大学で学んだ卒業生諸君、これを読んで如何感じられたであろうか。ぜひご感想をおうかがいしたい。今の学生諸君は、このような教官の「生活指導」を受けながら、日々勉学にいそしんでいるのである。昔は、日々運動にいそしんでいたが。

蛇足とは思いますが、少し解説を加えておこう。こういう文章を見ると、黙っておれないのが私の悪いくせである。

●「このような指導法の効果を明確に把握していないが、無意味とは考えていない」

私たちは、「無意味とは考え」ないからこそ、何でもやるのであって、無意味と知りながらやっているのは、わが「金沢大学平和問題ネットワーク」の運動くらいなものだろう。だから、この一文はまったくの「無意味」

●「また、学科教職員・学生全員が出席する（但し、問題児は出席しないことが多い）卒業生・修了生送別会（通称追いコン）とその後の二次会で教職員と学生の人間的な触れ合いをさらに強めていることは、生活指導の授受がスムーズになるという観点からも意義深いと考えられる」

学生を「生活指導」するために（「生活指導」の目的は後述）、教官はコンパに出席して、いやな酒を飲んで歌のひとつも歌っているのである。ふつう、そういうものは「人間的な触れ合い」とは言わない。だましのテクニクの一つである。なお、「問題児は出席しない」のではなく、「出席しないのが問題

児」である。

- 「教官側から感じられる近年の生活指導上の一つの障害は、学生間の間違った（あるいは不正確な、あるいは楽な方向に墮落するような）情報の、特に下級生に染み込んでしまった悪影響である」

「学生間の間違った情報」とは、「あの先生の単位は取りやすいぞ」とか「あの講座へいくと、こんなひどいことをやらされるぞ」とか「間違ってもあの先生のもとにはつくなよ」とか、そういうことである。これらは、下級生にとってはまたとない貴重な情報であろう。それが教官にとって困るのは、それによって学生がこなくなることである。学生は自分の研究を支える労働者だから、来なくなっては業績が上がらない。私も教官だが、こういった情報のおかげで学生がほとんどこなくなり、「楽な方向に墮落して」いる。もっとも、私の場合は「学生間の情報」ではなく、教官が学生に与える情報によるらしい。

- 「学生の生活時間の中では、教官とよりも学生同士で過ごす時間が長いということ克服する術は見い出せないが、短時間の付き合いでも如何に教官側から有効な生活指導をするかをもっと研究する必要がある」

研究の必要はない。最近着任したある若手教官は、実習の後始末がなかなか進まないのに業をにやして、こんな張紙を張り出した。「後かたづけをしないものは、評価に影響する」 あっというまに後かたづけが進んだことはいうまでもない。それにしても、この先生は学生の下宿に泊まりこむつもりなのかね。

- 「生活が乱れていれば、それはほとんどダイレクトに学習態度・成績に反映されるので、教官としては学生の生活面の動向に相当神経を配る必要があり、感覚を研ぎ澄ましていなければならない」

学生の大半は結婚していないから、ふつうに言う「生活の乱れ」は起こりえない。それは、むしろ教官の方が危ない。ここでも話は逆であって、「学習態度・成績」の悪いもの、つまりあまり学校へ出てこない学生を指して「生活の乱れ」た学生と決めつけているだけである。「感覚を研ぎ澄まして」「学生の生活」をのぞきこむ、なんてこと、私はいやだよ。

- 「生活指導（学習指導と表裏一体）上かなりの問題がある学生に対しては、学生委員、教務委員や指導教官が協力して父兄とも連絡を取り合い更生の道をさぐることになる」

「不良少年」の「更生補導」を、大学がやっているとは知らなかった。大学にもPTAができそうだね。なお、親のことを「父兄」などと言うところに、この著者の思想が現れている。

- 「問題児のほとんどの父兄は、教官から知られるまで学生の実態を知らず、その間に転落の深みにはまってしまっているのだから、やはり、早期発見・早期対処が鍵であるが、なかなかそこまで教官の手が回らない」

私の息子が大学生の時、そうとう「転落の深みにはまって」いたようだった

が、知っているも「更生させよう」などとは思わなかった。そして、おかげで今は、自分の足でちゃんと歩いている。人間若い間に一度くらい「転落」したほうがよい。そんな経験をせずに偉くなると、自分の基準に合わない学生をすべて、「問題児」「転落・墮落」したものと決めつける、この文章の著者みたいな人格ができあがることになる。「早期発見・早期対処」は、ガンの治療くらいにとどめてほしい。

●「学生と言えども成人であり、こんなにまでしなければならぬのかという疑問もあるが、転んだ学生を一度は助け起こしてみる価値はある。しかし、一度助け起こしてもまた転ぶようであれば、再度助け起こす気持ちはほとんど無くなる」

これは、何のために学生の「生活指導」をしているかという、教官の率直な気持が現れているという意味で、非常に興味深い一文である。なぜ一度は助け起こす気になり、二度目はいやになるのだろうか。近頃流行りの「費用対効果比」理論を適用すればすぐわかる。労働者である学生を、まともに働かせるようにできれば、それは教官にとって利益になる。だが、二度、三度と「助け起こす」費用をかけると、彼が「更生」して働いてくれたとしても、かけた「費用」をまかなうだけの「効果」がない。だから、気持が「ほとんど無くなる」のである。

なお、最後の一文は、学生の「転落」の責任は教養部の先生にある、学部の我々が初めからやればもっとうまくやる、と宣言した文章である。今、文部省の指導で、全国の大学の教養部解体が進んでいる。金沢大学では、教養部の先生の抵抗で、全国1、2を争うほどおくれていたのだが、やっと解体への道に進み始めている。ここには、そうした教養部の抵抗へのいらだちと、抜きがたい教養部蔑視の姿勢が、はしなくも見事に表明されている。

(2)

この文章を読んだ教養部のある教官は、「これはファッションだ!」と口走ったそうである。ファッションとは、手許の辞書を引くと、「絶対権力を持つ独裁者に指導される政治体制; 全経済を統制し、いっさいの批判を弾圧し、侵略的な国家主義・民族主義を強調する」(『ランダムハウス英和大辞典』小学館)とある。

この文章の著者は、「問題児」「転落」「墮落」「道を踏み外す」「更生」といった言葉を、なんの規定もしないで、気楽に使っている。学生が「踏み外す」「道」とは何か、ということが、明記されていないのである。

それは自明のことだ、と著者は言うだろう。だが、それは、著者が「道」だと考えていることに過ぎない。学生の「道」など、どこにも規定はないのである。あるとすれば、かつて文部省がつくり、悪評だった「期待される人間像」のようなものであろう。毎日学校へ出てきて、講義を聞き、ゼミに出、研究や実験に精を出す。

それがこの著者の言う「期待される学生像」であるに違いない。学校へあまり出てこない。出てきても、講義やゼミで逆らう。研究や実験に熱心でない。これが、「転落し、墮落し、道を踏み外した」学生なのである。そして、学生に対して単位認定権という「絶対権力」を持っている教官は、はるかの高みから、そういう学生を断罪する。

どんな独裁者でも、自分の利益ではなく、国民の利益のために、権力を振るうという形をとる。あのヒトラーですら、初めは国家社会主義を唱えた。大学における小ヒトラーもまた、学生のために教官が、苦勞に苦勞を重ねて更生の道をたどらせるように書く。だが、結局はヒトラーは自己の利益のために権力を振るい、ドイツ国民とヨーロッパ人民にとんでもない苦しみを与えた。そして、大学の小ヒトラーもまた、すでに書いたように、自己の研究、自己の業績を上げるために、学生を使い、使えない学生を、「問題児」として切り捨てるのである。ここには、なぜ「問題児」が出てくるかという考察はいっさいない。すべて、学生本人が悪いのである。

「問題児」はなぜ生まれるのか。

理学部では、4年生になると、各講座に「配分」され、各教官について、卒業研究を行なう。4年生ともなれば、たいていの学生は自分の興味をもち、自分のやりたいテーマをもつようになる。もっていない学生も、このごろ増えてきたが。しかし、自分のやりたいことをやらせてくれる自由は、理学部全体見渡しても、ほとんどなくなってしまった。講座に「配分」され教官につかされた学生は、講座の研究、教官の研究の中からテーマをもらうことになる。それに逆らって、あくまで自分のやりたい研究をやればどうなるか。指導されないどころか、一切の研究上の便宜は拒否され、さらによほどの成果をあげなければ、卒業単位はもらえない。すくなくとも、「単位はやらないよ」と脅迫される。昔はそれでも、自分の研究をやった学生はいた。今は、そんな骨のある学生はいない。だから、ここで言う「問題児」は、そんな学生のことでない。

昆虫がきらいで、昆虫の絵が出ている高校の教科書のそのページをホッチキスで綴ってしまったという女子学生がいた。その彼女が4年生になって、なんとカイコを材料に使う卒業研究さされていたこともある。私はその子に、ホテルで盗んできた小さな石鹼をたくさん進呈した。シヨウジヨウバエのウジの皮からある物質を抽出するために、一年間ウジの皮をむかされた学生もいる。目的も分からず、徹夜で測定をやらされ、「私、測定ギャルなの」と自嘲していた女子学生もいた。就職試験で卒業研究の意味を聞かれ、答えられなくて落とされた子もいる。テントウムシに葉っぱを食わせ、その食い跡をゼロックスでとって、方眼紙の上に置き、食い跡の面積を計るという仕事を一年やって、頭が真っ白になって休学した学生もいる。こんな例は、枚挙に困らない。

ギリシャ神話に、シジフォスという人物が出てくる。罰として、大きな石を山の頂上まで運び上げなければならない。ところが、ようやく頂上近くへきたところで

必ず石は転がり落ちる。彼はまた下から運び上げる。単調な仕事を意味も目的も分からず、ただ続けるという作業が、死にまさる最大の苦痛だと言うことを、この神話は示している。何の因果か、現代の学生はすべて、シジフォスと同じ罰を受けているのである。

ここまでくると、さすがに耐えられなくなる学生も出てくる。耐え切るよりも、そのほうが人間としては当然なのだが。しかし、今の学生は、反乱は起こさない。登校拒否を起こすのである。こうして、学生の「墮落」「転落」「道の踏み外し」が生じ、「問題児」が出現する。すると教官は、「神経を研ぎ澄まして」学生の生活をのぞきこみ、手に余れば親に告げ口しておどかし、なんとか「更生」させようとする。労働者が働かなくなるとは業績が上がらないからである。そして、一度は「助け起こす」が二度とはやらない。こういう学生は、お情けで単位を出してもらって卒業するか、休学に追いこまれ、ついには中途退学という運命が待ち受けている。

佐高信という辛口の経済評論家が、現在の日本の会社員を「社畜」と名づけたことがあった。会社に飼われ、会社のいうままに働いている会社員を見ると、たしかにそうだと思う。我が同僚のある先生が、「これではまるで『学畜』やなあ」と言った。「そやけど、家畜は少なくとも食いものはもらってるで。学生は食わせてもらうどころか、授業料払ってるやないか」「学畜以下か。何というたらいいんやろ」二人で考えたが、ぴったりした言葉は思いうかべることができなかった。何かいい言葉はないですかね。

(3)

昔の大学は、こんなことはなかった。私が学生だった40年前、先生方は少なくとも、学生を使って研究しようなどという、さもないことはやらなかった。もっとも、その頃は学生が威張っていたから、やれなかったのかもしれない。せいぜい、どこかから研究費をとってきて、「君等が使え」といってくれるくらいだった。もちろん、大学の校費とちがって、他からくる研究費には目的がついている。だけど、その目的に大きくはずれさえしなければ、研究の仕方は院生や学生の自由であった。それすらもいやな学生は、研究費の少ないことさえ我慢すれば、まったくの自由にできた。

私が金沢大学へ来た20年前には、学生がテーマの自由を求めてわいわいやっていた。ということは、それ以前、ここにはテーマの自由がなかったのだろう。

いったい、どうしてこんなことになってしまったのか。

ソ連をはじめとする社会主義政権が軒並み倒れ、資本主義的競争原理こそ正しいという思想がいつそう力を強めてきた。すべては競争で決まる。そして、大学における研究者の業績競争も激化した。アメリカではずっと前から行なわれてきたのだが、日本の大学は年功序列・終身雇用制度に守られて、アメリカほどはひどくはな

かったのだが、ここへきて急速に競争的になってきた。とにもかくにも業績を上げて仲間を蹴落とし、出世競争を勝ち抜かねばならぬ。

大学で業績を上げる方法はいくつもあるが、いちばん簡単で確実な方法は、学生を無給労働者として使うことである。学生10人に自分の研究の一部をやらせ、そのデータをうまく使えば10編の論文が労せずしてできあがる。20人使えば20編できる。研究費の額と学生の数で業績は決まるのである。

こうなると、学生への「教育」ということは考えられなくなる。資本家は労働者の成長など考えない。質の向上は計るが、それは、労働者本人のためではなく、あくまで生産性向上のための質の向上である。大学でも同様に、学生本人が自立していくための教育ではなく、論文の生産性向上のための学生の質の向上を指して、教育ということになる。その典型が、上記の「生活指導」なる一文なのである。

新進気鋭の大学教官は、今、こんなことを考えている。いや、こんなことしか考えていないのである。大学から、真の教育はなくなってしまった。それどころか、「学生が好きな」教官も、数えるほどしかいなくなった。大学教官が学生を見る目は、「こいつは俺の研究に役に立つか立たないか」でしかない。

社会主義社会に学生を暖かく見守るおおらかな教育があったとは言わないが、社会主義社会を倒し、いまや全盛を誇る資本主義的競争社会は、こうして真の教育を完全に崩壊させながら、役にも立たない、いやそれどころか、自然破壊、公害を生み出す業績競争に突入してしまった。

(4)

この一文を載せた、『金沢大学理学部・教育と研究の現状と展望』(VOL. 1, 1993)なる印刷物は、わが金沢大学理学部が総力を挙げて、というところちょっと言い過ぎで、というのは、少なくとも私は一切協力していないからだが、自分たちの研究と教育を自分で「点検・評価」して、つくりあげたものである。ここ数年、日本の大学は、「自己点検」といういやらしい言葉に振り回されてきた。

厳しい競争に勝ち抜くために徹底的に合理化を行ない、「過労死」という言葉を世界的に通用させてきた日本の経済界が、ぬるま湯にひたっているように見える大学に批判を強め、それを受けて文部省が大学に要求したのが、この「自己点検」なるものである。

もっとも、文部省は、「やれ」と言ったわけではない。大学が毎年、学科増、講座増、新式の機械などを要求する「概算要求」に、「自己点検」文書をつけてくださいと言っただけである。それだけで、大学は大騒ぎとなった。「つけなければ、概算要求を認めませんよ」という、文部省の影の声を聞いてしまったからである。金がなければいくら「学畜」を集めても、使いようがない。さあ大変だということになった。

そこで、大学は自分で、教官がいかにか涙ぐましい努力を続けているかということ、を、文書にすることになった。しかし、このことは当然、教官一人一人の業績点検ということになる。一流大学を出て、若くして助教授・教授となり、たくさんの学畜を使って、中身はともかく、数だけは業績を上げている教官ならいいが、一人でこつこつと研究していても、こと志と違ってなかなか業績を上げることのできない下っ端教官にとっては、相当な脅威となる。弱い立場の組合員を守るのが組合だから、当然組合は反対するだろうと思っていたら、これまで組合活動の中心となっていたような革新的教官が、いっせいに「自己点検」をやろうと言い出したのでびっくりしてしまった。

さすがに彼らは、文部省が言うからやるのだ、とは言わなかった。大学は国民のためにある。国民の目から見ると、今の大学はだらけている。研究しない教官、古ぼけたノートを読むだけの老教授。文部省のためではなく、国民のために、我々は積極的に「自己点検」をやって、大学を活性化しなければならない。

自分のやっている研究や教育をたえず反省し、国民の迷惑にならないように自戒することは、良いことである。しかし、それは、教官個人々々が自分の信念にもとづいて、自分でやればよいことで、文部省が金をくれないからといって、みんな一斉、あわててするものではなかろうと、私は思うが、「革新的教官」の考えはそうではないらしい。

そのころ、教職員組合主催の「大学改革と自己評価問題について」という、教育研究集会が開かれた。こういう会にはほとんど出席しないのだが、「お前も自己点検しろ」などと、大学当局からならともかく、組合から言われてはかなわないから、ちょっと出てみた。その感想文を、組合の機関誌に投稿したので、全文引用しておく。

教研集会「大学改革と自己評価問題について」に出席して

所用のため途中で退席したので、あまり偉そうなことはいえないのだが、「自己評価」についてちょっと感想を述べてみたい。

この集会に出て、いちばんびっくりしたのは、自己評価をしなければ文部省が概算要求を通してくれないから、自己評価をしなければならないということが、まるで規定の事実であるかのように語られていたことである。私は思わず、「それでは大学の自治はどこへいったのだ」と、発言してしまった。

大学教官用の「文部省・指導要領」はない。大学にはさまざまな思想・信条をもつ教官がいて、それぞれ自分の信ずる研究と教育を、自分の責任で行なっている。文部省といえども、それにくちばしを入れることを許さないというのが、大学の自治の基礎であり、研究教育の自由というものであったはずではないか。金をくれないから意に反することでも文部省のことを聞くというのでは、ダイヤモンドに

目がくらんだお宮と大してかわりがあるまい。

これに対し、「文部省とかかわりなく、大学は自己評価をする必要がある」とか「国民の期待に果たして大学が答えているか、自己点検が必要だ」という反論が出た。確かに、今の金沢大学が理想的な状況にあるとは、私自身のことを考えても、言えそうにない。非常勤職員を10年以上もそのままにしておいて、しかもそのことに心の痛みすら感じないという状況は、腐敗的であるとさえいえる。しかし、だからといって、外部の圧力で「自己評価」をしようというのでは、救いようがない。それは、権力の意向を取り込み、大学における研究競争を激化させ、中学・高校において猛威をふるっている競争原理を大学にも貫徹させる結果となるだけである。決して非常勤職員の定員化を進めるようなことにはならず、むしろその逆になるものと思われる。

「国民の期待論」についても、一言しておこう。まず、国民が期待しているものが何かとお聞きしたい。国民にもいろいろな立場の人がいるから、その「期待」もさまざまである。高度な国際的研究をやって国威を発揚せよという「期待」もあるだろうし、近代科学・技術は公害や環境破壊、試験管ベイビーまでつくりだしたから、この辺で考え直したらどうだという「期待」もあるだろう。企業ですぐに役立つ人材をつくれという「期待」と、自分でものを考えられる自主的な人間を養成してほしいという「期待」を、どのように両立させようというのだろうか。

太平洋戦争の直前、世論調査をやったとすれば、おそらく戦争賛成の意見が多数を占めたと考えられる。当時の大学は、「国民の期待」にそって、軍事研究をするのが正しかったのだろうか。大学の研究教育は、時の権力はもちろん、時には国民の多数意見からも独立に、あくまで教官個人個人の思想・信条によって行なわれなければならないと、私は思っている。それこそが、「大学の自治」「学問の自由」というものではあるまいか。

自己評価は、いずれ第三者機関による他からの評価へと進むにちがいない。国鉄にならって、大学の「分割民営化」までいくかも知れない。その時、文部省の「良い子」になって、自分のところだけは生き残ろうというのが、自己評価路線であろう。それが仮にうまくいったとしても、大学は徹底的に合理化され、きびしく業績を点検され、自主的で自由な研究とそれを支える自由な思想は窒息してしまうに違いない。

大学を大きくしなくとも、研究費を山ほどもらわなくても、私たちが研究することはたくさんあり、自主的な学生を育てるのには、それほど金は要らない。小さくささやかでもいいから、自治と自由を持った大学にすることこそ、現在の急務ではなからうか。

しばらくすると、同じ組合の機関誌に、「大学人の責任と自己評価」という、長文の投稿が載った。私への反論という形はとっていないが、いまの大学が、金の面

でも人の面でも、いかに貧困であるか、しかも、さぼっている先生がたくさんいる、今こそ正しい自己評価が必要なのだという内容で、私の意見に刺激されて書かれたものに間違いはない。

それで、礼儀上、私はもう一度、投稿した。それも、全文引用しておく。

自己評価 再論

本誌四八二号に、「大学人の責任と自己評価」という投稿が載った。相当長文であるが、もう一つ意味がよくわからない。私なりに理解した点について、感想を述べておきたい。

投稿者は、科研費があたらなかったら、研究ができなくなるほど、今の大学は貧困だと言うことを強調する。有能な研究補助者（非常勤職員のことか？）を雇える金もなく、学生が質問にすればそれだけ貴重な時間が無駄になる。あたりを見回すと、「学術論文の書き方を忘れた先生」や「休講続きの先生」ばかりが目につく。そこで、売られたケンカを買って、われわれ自身の手で正しい自己評価をやり、大学に正当な金を回させよう、というのが、この投稿の主旨であるらしい。

この投稿者の「理想」が実現すると、大学はどうなるだろうか？ 大学に科研費その他自由に使える金がどっとはいつてくる。非常勤職員やパート職員という形で研究補助者が際限なく増えていく。「有能」な研究者は研究や実験にますます忙しくなり、ゆっくりものを考えるひまもなくなる。研究補助者がいれば暇になるというのは、少々甘いのではないか。研究は奥深く、研究者の研究欲はかぎりがない。そして、その一方で、自己評価の「権力」の下、論文を書かない、講義しない先生は追い詰められ、職を失うところまで行くかも知れない。

私にはそんな趣味はないが、もし近くに目に余る先生がいれば、直接批判すればよいのである。そういう先生は定年間近かの有力教授に多いから、批判しにくいのだろう。だからといって、官許の「自己評価」でやろうというのでは、身勝手に過ぎるというものではないか。それに、官許の自己評価などに頼ると、有力教授が不利になるようなことは有り得ない。真面目に研究教育にはげんでいるが、成績があげられない下っ端教官が槍玉に上がることは目に見えている。投稿者はまさかそれをねらっているわけではあるまい。

研究補助者まで使って、息せき切って研究しなければならないということも、よくわからない。世界の第一線に立って、無数の研究者相手に競争し勝ち抜くともいうのなら、確かにそうだろう。しかし、何の必要があってそんなことをしなければならないのか。そうして進んだ科学・技術が、一部の人々の金儲けの役に立つことはあっても、リオデジャネイロのストリート・チルドレンのためになるとは思えない。百歩ゆずって世界人類全体の役に立つ研究であったとしても、その競争に巻き込まれてあくせくすることはあるまい。研究というものは、だれが成功しても結

果は同じである。条件のよいアメリカの大学が必ずやってくれる。日本の貧乏大学が背伸びすることはない。

『アエラ』という雑誌に、「常温核融合 宗教から科学へ」という記事が出ていた（第五巻二四号、一九九二・六・一六）。三年前に話題を呼んだ、試験管のなかで核融合反応を起こさせる研究が、特に日本で細々ながら続けられているという記事である。しかし、数千億の巨大な研究費を使って進行している高温高压核融合の研究者からは、異端者あつかいされているという。常温核融合の研究が成果をあげるかどうか、そんなことは誰にもわからない。だけど、「追求していった先に、何もないかもしれないが、それはそれでサイエンス」と、東工大の岡本真実教授は言っている（同誌、四二ページ）。むしろそれこそサイエンスではないかと、私は思っている。高温高压で核融合が起こることはすでにわかっていることで、あとはその条件をいかに作り出すかということに過ぎない。

誤解のないように一言断っておくが、私は、高温核融合の研究をしてはいけないと言っているのではない。自分たちが膨大な研究費を使っているからといって、常温核融合の研究者を圧迫してはいけないと言っているのである。自分が研究補助者を使いたいからといって、自己評価を強制するようなことはやめていただきたいと思っているのである。

自分で考え、ささやかでもいいから本当に面白い研究をやっていたら、そして、寸暇を惜しまず学生の質問に真面目に対応していたら、学生も自発的に協力してくれるかも知れない。貧乏大学の研究者には、そんな道もあると思うのだが、どうだろうか。

それっきり、組合のほうからの反論はなくなった。しかし、「自己点検」作業は着々と進み、私には協力を求められなかったが、いつのまにか、初めに書いた大冊の報告書がまとまったというわけである。

この中には、理学部の各学科、各講座、各研究者の、研究教育の内容が、びっしりと書かれている。皮肉屋の物理学のある教授は、「自己点検文書じゃなくて、自己宣伝文書じゃね」とのたまったが、たしかに言いえて妙である。もっとも、教授が、自分のところの助手の研究を、悪意に満ちて書いているようなところもある。そして、そのピークとも言えるものが、最初に上げた文章だった。

資本主義社会では、金を出すものが経営者であり、金をもらって働くものが労働者である。労働者は、基本的には経営者の言うことを聞かなければならない。

大学では、金を出しているのが学生で、金をもらっているのが教官である。学生が経営し、教官が労働する。中世イタリアで発祥した大学は、学びたいものが集まって組合をつくり、教師を雇って勉強したことにはじまる。これが大学の原型である。

今、大学は、経営者と労働者が逆転している。労働者が会社を管理しているようなもので、本当を言えば、私など、これは理想の形ではないかとも思うが、資本主

義社会においては許されないことであろう。だから、そのことまで思いを致し、学生を尊重して、その自主性をのばしていくような教育に努力する、といったような「自己点検」なら私も賛成だが、どうやら、反対であるらしい。労働者のくせに、経営者をこき使って業績を上げる教官が威張れるような「自己点検」文書になっている。

「古き良き大学」は死滅しつつある。いや、もう死滅してしまったかも知れない。私が、『自由の森学園』にうつつを抜かしている気持が、わかっていただけるだろうか。

いっせい草抜きボランティア
— 理学部の人々は勤労奉仕がお好き —

金沢大学には、全学の教官・職員を組織した、「金沢大学教職員組合」がある。わが理学部もそれに参加し、「理学部分会」をつくっている。その分会の機関誌「分会ニュース」に、最近面白い投書が載ったので、紹介しよう。

時代錯誤の「勤労奉仕」

このところ、あっちこっちで芝生の草抜きが流行っている。教授を先頭に、教官・職員・学生が打って一丸となり、勤務時間を無視して草を抜いている姿は、少々異様である。とても「大学」で行なわれることとは思えない。芝生の草抜きも、「自己点検」項目にはいつているのだろうか。

この草抜き作業は、まさか正規の業務だとは思えない。大学教授の給料は、草抜きという「単純労務」の代償として支払われているわけではないからである。すると、いま流行りのボランティアということか。ボランティアというと聞こえはいいが、日本語ではこれを「勤労奉仕」という。私達老年世代は、戦争中にいやというほどやらされた。

勤労奉仕は、まず、忠魂碑や神社の清掃から始まる。全校生徒が学業を放棄して、ほうきと塵取りをもって集まり、いっせいに落ち葉を掃除するのである。掃除がすむと、校長先生が一席訓辞をする。

戦争が進み、学年も進むと、勤労奉仕もだんだんエスカレートしてくる。中学校へはいったころには、いろんなことをやらされた。防空壕掘り、防火用水池掘りなどはまだいいほうで、ガソリンの代わりにするという松根油をとるために、松の根子を掘らされたのはひどかった。国鉄の貨物駅で荷役をさせられたこともある。空襲の時に延焼を防ぐということで、街のあちこちに空き地をつくるため、家を強制的にとりこわす仕事にいったこともある。家の棟に長いロープをくくりつけ、1学年300人くらいでひっぱると、家が土煙を上げてどさんと倒れる。これはちょっとおもしろかった。そしてしまいには、各種の工場へ動員され、飛行機や大砲をつくられるところまでいった。なれぬ作業に、怪我人が続出し、指を失った友達もいる。

これらは、もちろん「奉仕」だから、給与はくれない。すべてただ働きである。いま思えば、疑問も持たず、よくやったものだと思う。

いま流行りのボランティアなるものは、自発的意思が原則となっている。戦争中の勤労奉仕はもちろん自発的なものではなく、上からの強制である。だから、理学部周りの芝生の草抜きが、正真正銘、自発的なものであるのなら、私は何もいわな

い。私はそうとは思わないが、雑草は汚く、芝生はきれいだと思う人がいても、別にかまわないからである。

しかし、いま行なわれている草抜きは、主任会議で決めたものだという。そして、各学科別に、担当区域も決まっている。どうやら、理学部挙げての「業務」らしい。私にはどうしても、戦争中の「勤労奉仕」のイメージと重なってくるのである。そして、そのエスカレートした状態も浮かんでくる。春は草抜き、秋は落ち葉掃除、そして、冬には雪どかし。

もともと、文化的な城内を捨てて、草深い角間の山の中へ引っ越してきたのは、自然を求めてではなかったのか。野の草は自然である。そこへ芝生など植えるから、自然の野の草が「雑草」になってしまう。雑草と言う草は本来ない。すべて、ちゃんとした名前をもった、立派な植物である。

もし、どうしても芝生にとりまかれたいのなら、職員や学生に勤労奉仕の強制などせず、専門の業者に委託すればいいではないか。もし、委託費がないというのなら、芝生にしたこと自体、そもそも計画が間違っているのである。いったい、誰がそんな計画を立てたのか。

戦争中ではあるまいし、この「平成」の御代に「勤労奉仕」など、時代錯誤もはなはだしい。組合は早々に交渉して、勤労奉仕の強制をやめさせてほしい。

(一組合員)

ある学科から正式に要望があって、組合執行部は当局と交渉した。当局の回答は、「これはあくまでも、自発的意志によるボランティアであり、強制ではない」というものだった。

だが、事實は、投書にあるように、各学科の主任教授と学部長で構成し、理学部の管理運営の大部分を決めている「理学部主任会議」で決定し、各学科に割り当てを決めて行なわれたものである。そして、各学科では、教官・職員・院生・学生の大半が参加した。参加しなかったのは、私の知る限りでは、ある学科の二講座（教授が怒って、参加させなかった）と、私たちの仲間数人しかない。

しかし、参加した人は、みんな喜んで草を抜いていたかといえば、そうではなかったらしい。たいていブツブツいいながら草を抜いていた。ある学科の教官は、「これから教官採人事の条件として、草抜きのできる人、というのをいれんとあかんあ」とつぶやいたそうである。学生もまた、文句たらたらであった。学生は大学へ、学問を習いに来ているのだから（ほんとかね）、無理もない。上の投書は、そういう人々に「愛読」されたようである。

そんないやなものを、彼らはなぜやるのだろうか。理由は簡単で、参加しなければ上からにらまれるからに過ぎない。いまや、理学部は打って一丸となって研究教育に邁進することになっており、その秩序を見出すものは、非国民ならぬ「非理学部人」なのである。その締め付けは、ついに「草抜きボランティア」にまでおよん

できたというわけである。

学生もまた、その一丸のなかに丸めこまれている。なにしろ、別項（「大学における学生の地位」）のような先生がいるのだから、学生といえども草抜きボランティアに参加しなかったら、たちまち「転落」「墮落」の焼印をおされ、「更生」の対象にされかねない。そんなことになっては大変だから、まあ、1時間か2時間、辛抱するか、ということになる。

だが、立場の弱い職員はともかく、教官と学生が、ただそんなことだけのために、いっせい草抜きに参加するというのが、私にはよく分からない。やっていて、何か突だとは思わないのだろうか。そして、今は草抜きだけど、いずれはもっと厳しいことにも「自発的に参加」しなければならぬハメに陥ることが、分からないのだろうか。権力に対する抵抗というものは、ほんのつまらぬことから始めなければ、必ずずるずるとひきこまれてしまうものなのである。草抜きに抵抗しなければ、召集令状に抵抗することなどできやしない。まあ、草抜きに抵抗しても、出来ないかも知れないが。

そうではなくて、理学部の人たちは、本当に自発的に参加したのかも知れない。つまり、「理学部人」はボランティアが好きなのである。もしそうなら、草抜きなどつまらないことをすることはない。世界中に、助けを求めている人間はたくさんいる。理学部人全員、カンボジアでもソマリアでもモザンビークでもボスニア・ヘルツェゴビナでも、まとめて行ってもらったかどうかと思う。私は行かないが。

もっとも、向こうから、「じゃまになるから、来てくれるな」と言われそうではある。
(のら)

《編集局だより》

(会長と第6編集局長との会話)

(生物学会本部の机の上に、無造作に置かれていた、大串龍一著『日本の生態学—今西錦司とその周辺』(東海大学出版会)を手にとって)

6局長：あ、これ、大串先生の本ですね。

会 長：そうや。君の恩師の本や。読んだか。

6局長：読みましたよ。でも、不思議なことがあるんです。

会 長：何や、不思議なことって。

6局長：これ、京都大学の生態学のことを書いた本でしょう。

会 長：まあな。

6局長：会長は京都大学でしょう。

会 長：そうや。

6局長：この本、どこ探しても、会長の名前、出てこないんですよ。なぜですか？

会 長：それは、君の読み方が足らんからや。

6局長：えっ？ どこかに出てるんですか。ずいぶんちゃんと読んだはずなんだけどなあ。

会 長：名前は出てこんよ。でも、あちこちに出没してるんや。「眼光紙背に徹す」というてなあ、本というものは紙の裏まで見とおさなあかんや。

6局長：そんなこと、無理ですよ。紙の表でもわからないのに。いったい、どこに出てるんですか、会長は。

会 長：ちょっと貸してみ。

(会長、本を手にとって、ぱらぱらめくる)

会 長：ここ、読んでみ。

6局長：いちばん最後のところやないですか。

「目標設定の誤り

この生態学が理論を軽視した、あるいは理論に弱いというところかなり意外に感じる人が多いだろう。データ主義を批判して、理論の大切さを強く唱え続けたのが京都大学理学部の動物生態学の特長のように思われているからである。ここに理論というものに対する誤解があったように思われる。また別の面からいえば、学問を進める上で設定した目標に間違いがあったようにみえる。

学問を進めるためには、まず解決すべき目標の設定が不可欠である。それが正しく設定されてはじめて、有効な理論の建設が可能になる。今西には生物的世界がどのようにして構成されているのかを知りたいという強い

目標があった。内田は生物の数が何によって決まっているかを追求した。それによってすみわけ理論なり個体群の密度効果なりの有効な作業仮説が生まれたのである。それに対して、京都のその後の指導的立場に立った渋谷らによって提案された、生物の生活をよりよく知りたいという問題設定は果たして有効な目標になりえただろうか。

ある時期から、日本の生態学の中には研究者の思想傾向がどのようなものであるかを重視して、着実にデータを積み上げるものを批判する傾向が高まった。これは渋谷・徳田らの影響を一面的に受け継いだ生態学研究者の中に特に多い。そして、その時期から世界的に大きな問題となってきた自然環境の変化を、もっぱら社会的要因によるものとして割り切った見方を押し進めた。これが環境研究の主導権を、生態学から医学と工学に移してゆく上で大きな役割を持ったように思われる。それが日本における生態学の凋落のはじまりである。ここに京都大学の生態学が日本の生態学の発展におよぼした功罪のうちの「罪」の部分があると考えられる。そしてそれは今西学派とは別のものであった」

6 局長：このどこに会長が出てるんですか？

会 長：「世界的に大きな問題となってきた自然環境の変化を、もっぱら社会的要因によるものとして割り切った見方を押し進めた」のは、誰やと思う？

6 局長：もしかしたら、会長ですか？

会 長：そうや。悪名高い『生態学入門』という本があつてな。そのなかで、生態学者の自然と社会の認識を批判したんや。

6 局長：『生態学入門』も一応読みましたけど、そんな悪い本なんですか。うん、なるほどな、と思ったんですけど。

会 長：あの本読んで、うん、なるほど、なんか思ったら、もう出世はできんで。あの本読んで、炭焼きになった男までいるんやから。

6 局長：えっ？ 炭焼き・・・？

（気持悪そうな顔をする）

会 長：まあ、おれが社会の問題やと言うたのは、単なる「自然環境の変化」やなくて、水俣病とかイタイイタイ病とか、具体的な公害のことやけどな。日本全国あちこちに、企業が原因の公害が起こって、被害者が必死で運動していたときに、生態学者が、公害のような地方的、局所的な問題より、地球的自然環境の汚染のほうがもっと大事やと言いつつな。そんなことしたら、公害反対運動に水をさすだけやと、おれは言うただけなんや。生態学者が、自然環境の変化を研究するのがいかん、なんか、一言もいうとらん。

6 局長：だけど、大串先生の言い分では、「それが日本の生態学の凋落のはじまり」

だということになってますけど、もし会長の本がそれだったら、日本の生態学を凋落させたのは、会長なんですか。

会 長：おれはそんなこと考えてないけど、大串教授はそう思ってるらしいな。

6 局長：もしそうだとしたら、会長って、大物なんですね。一人で日本の生態学を滅ぼしたんですから。

会 長：すごいやろ。見直したか。

6 局長：みんなが、この部屋を敬遠する理由がわかりましたよ。僕もそろそろ失礼しようかな。

会 長：ここのモットーは、「来るものは拒まず、去るものは追わず」やから、失礼するのはいつでもかまわんで。

6 局長：何ですか、その「来るものは」何とかいうのは。

会 長：昔な、中国に孟子という人がおってなあ。

6 局長：知ってます。お母さんが、教育に悪いといって、3回引越して育てた人でしょう。

会 長：よく知ってるな。その孟子がな、弟子をたくさん引き連れて、ある国へ来るんや。孟子は国王に聖賢の道を説くんやけど、まあ言うこときかんわな。そのとき、孟子の弟子のひとりが、物を盗んで捕まってな。役人が、「お前は聖賢の道を説いてるけど、弟子は盗人やないか」と責めたのや。

6 局長：孟子は困ったでしょうね。

会 長：そのくらいで困ってたら、学者にはなれんよ。孟子は平然と、「おれの一門は、来るものは拒まず、去るものは追わずが原則である。一人や二人、不心得ものがいっても当然や」とうそぶいたらしい。

6 局長：何だかちょっと、責任逃れみたいな気がしますね。

会 長：気がするのやなくて、責任逃れそのものや。

6 局長：ひょっとしたら、会長のもそうですか。

会 長：もちろんそうや。来るのも去るのも本人の意志やから、どうなってもおれは責任もたん。

6 局長：ますます怖くなってきた。一人で生態学をつぶしてしまう人だとは知らなかったものなあ。

会 長：もう一つ、解釈があるよ。それは、一人がちょっと言うただけで、つぶれてしまうくらい、日本の生態学はたよりないものやった、ということや。

6 局長：それもそうですけど。だいたい、この話、本当なんですか。

会 長：まあ、だいたいにおいて、ウソやな。

6 局長：ウソなんですか。

会 長：「これが環境研究の主導権を、生態学から医学と工学に移し」と書いてあるやろ。

6 局長：ええ。

会 長：医学と工学は、環境研究をやってるわけやね。

6 局長：そうなりますね。

会 長：医学と工学がやってること、なんで生態学がでけへんのや。

6 局長：うーん。そう言えばそうですね。なぜやらなかったのかな。

会 長：それはな、初めから生態学者は、そんなこと本気でやる気はなかったんや。

6 局長：ほんとですか！

会 長：本気でやる気があったら、ちょっとくらい批判されてもやるはずやろ。

6 局長：じゃ、なぜ生態学者は環境問題をやろうとしたんですか？

会 長：金になるからや。公害問題が起こって、政府は困ってた。それを解決してやろうというたら、金が出るやないか。

6 局長：お金の問題なんですか。

会 長：ところが、政府にみすかされて、あんまり、金が出なかった。それでみんな手を引いたというわけや。

6 局長：それなら、生態学をつぶしたのは、会長じゃないことになりますね。

会 長：残念ながらね。おれはそれほど大物やない。

6 局長：残念ながらということは、会長は生態学、つぶしたかったんですか。

会 長：まあ、解決する能力もないくせに、公害問題の専門家やいうて出てくるような生態学は、つぶしたほうがええのとちゃうか。

6 局長：じゃ、会長はどんな生態学をやってるんですか。

会 長：そんな答えられん質問はするな。

日本生物学会誌 第33号 1993年7月31日
編集・発行 日本生物学会
金沢市角間町
金沢大学理学部生物学教室
223号室
編集無責任者 奥野良之助
許可無断転載